

## 『ヴァジュラーヴァリー』「墨打ちの儀軌」和訳（上）

森 雅 秀

A Japanese Translation of the Sūtraṇavidhi in the *Vajrāvalī nāma maṇḍalopāyikā*(1)

Masahide MORI

はじめに

『ヴァジュラーヴァリーというマンダラ儀軌』（*Vajrāvalī nāma maṇḍalopāyikā*, 以下VA）は、インド後期密教を代表する学僧アバヤーカラグプタ（Abhayākaragupta 11世紀後半-1125）による大部のマンダラ儀軌書である。マンダラを制作するプロセスと、それを用いて行われる二つの儀礼、アビシェーカ（abhiṣeka）とプラティシュター（pratiṣṭhā）などを解説する。インド後期密教の儀礼の実態を知るためのもっとも重要な文献のひとつに数えられている<sup>1</sup>。

この文献の中には、当時知られていた代表的なマンダラについて、実際にそれをどのように描くかがくわしく説かれている。ここで描かれるマンダラは、米の粉などの溶液を付着させた糸を、地面の上ではじいて輪郭線を引き、鉱物を砕いた粉末などを用いて彩色される。VAではこれらのプロセスが、「墨打ちの儀軌」（*sūtraṇavidhi*）と「彩色の儀軌」（*rajaḥpātanavidhi*）という二つの章で説かれている。マンダラに含まれる尊格は、すべて金剛杵や蓮華などのシンボルで表されるため、「彩色の儀軌」では、これらのシンボルも尊格ごとに指示されている。アバヤーカラグプタはこの二つの章にVA全体のおよそ3分の1を費やす。

VAに説かれるマンダラは、代表的なものを数えると26種であるが、中尊の変更、周囲の尊の増減などによって、さらに細分化される。詳しい説明は省略し、典拠となる経典を参照するよう指示する場合もある。このようなものも含めるとマンダラの全体の数は42となる。『秘密集会タントラ』（*Guhyasamājantra*）のジュニャーナパーダ流のマンダラ「文殊金剛マンダラ」（*Mañjuvajramaṇḍala*）がはじめにあげられ、インド密教の掉尾を飾る「時輪マンダラ」（*Kālacakraṇḍala*）を最後に置く<sup>2</sup>。

このうち、最後の時輪マンダラ以外のマンダラは、すべて共通の形態を持ち、マンダラごとに異なるのは、尊格をおさめる楼閣の内部（内陣）のみである<sup>3</sup>。そのため、アバヤーカラグプタは「墨打ちの儀軌」において、まずはじめにこの共通する部分の輪郭線を解説

し、つづいて各マンダラの内陣について、相違点を中心に線の引き方を順に述べる。そして、時輪マンダラについては、あらためてマンダラ全体の輪郭線から説明を始める。「彩色の儀軌」でも同じ方法がとられ、時輪以外のすべてのマンダラに共通する部分の塗り分け方に始まり、続いて尊格を表すためのシンボルがマンダラごとに列挙される。最後は時輪マンダラの全体の彩色方法と、そこに描かれるシンボルの名称があげられる。

本稿は「墨打ちの儀軌」の前半部である「根本マンダラに線を引く順序で、[時輪マンダラ以外の]すべてのマンダラに共通する部分<sup>4)</sup>」の和訳である。それぞれのマンダラの内部と時輪マンダラの墨打ちを扱う後半部は紙幅の都合で別項として準備している。後半部の末尾には、墨打ちの方法を要約した「墨打ちをまとめた偈」(sūtrasamgrahaśloka) も含まれる。

これまでも筆者は、VA にもとづいてマンダラの墨打ちに関する論考をいくつか発表してきた(森 1992b, 1997, 2000)。これらを通じて、VA が成立した12世紀前半のインド密教において、実際に制作されていたマンダラの形態がいかなるものであったかが、ある程度明らかになった。さらに、タンカや砂マンダラの形で制作されるチベットのマンダラが、その忠実な継承者であることも確認された。しかし、これらの既発表の論考では、VA から墨打ちに関する基本的な情報を抽出して紹介するにとどめ、VA の本文そのものは一部を除いて示していない。昨今、チベットやインドのマンダラへの関心の高まりとともに、マンダラの形態を一般向けに紹介する文献も現れるようになった。その中には拙著(1997)などの図版をそのまま転載するものも見られるが、その背景となるマンダラの墨打ちに関する一般的な知識が欠落しているために、初歩的な誤りを犯しているものも散見される。マンダラの墨打ちに関するもっとも基本的な一次資料として、VA のこの章全体の翻訳を提示することが求められている。

VA のサンスクリット・テキストとチベット訳テキストは、灌頂とその関連儀軌が桜井宗信氏(1996)によって、和訳研究とともに公表されているが、それ以外の部分は、断片的なものを除き、現在のところほとんど発表されていない<sup>5)</sup>。本来であれば、翻訳を提示する前の段階として、批判的校訂テキストを明らかにすべきではあるが、VA 全体のテキストをまとめた形で刊行する予定であることと、上記のように、VA の墨打ちに関する情報をひろく提供する必要があるというふたつの理由で、翻訳の発表を先行させることとした。もとより、VA の中でもとくに専門用語が頻出する難解な箇所であることや、信頼しうる先行研究が乏しい分野であることなどから<sup>6)</sup>、誤訳や思い違いも多々含まれることをおそれるが、大方の批判・叱正をへて、正確なものに近づけたいと考えている。

VA はインド後期密教の代表的な儀礼文献であるが、その評価はチベット仏教でもきわめて高い。とくにゲルク派の開祖であるツォンカパ・ロサンタクパ(Tsong kha pa Blo bzang grags pa, 1357-1419)は、彼の主著のひとつ『真言道次第』(sNgags rim chen po,

NRC) において、マンダラ制作とそれに続いて行われる灌頂儀礼の次第を、VA を基本として論述すると明記している<sup>7</sup>。NRC に含まれるマンダラの墨打ちに関する部分は、同書の研究を精力的にすすめておられる北村太道氏とツルティム・ケサン氏によって翻訳が発表された (2001, 2002)。墨打ちに関する専門的かつ難解な議論などが多く含まれるが、現在のチベットの僧侶によるマンダラの部分図などもあわせて提示することで、理解の便を図っている。ただ、訳文がいささか生硬であることと、意味が取りにくい箇所がところどころ見受けられるのが惜しまれる。本稿においても NRC およびその翻訳は随所で参照し、とくに訳註においては、ツォンカパが同書の中で VA と関連づける諸文献を明示するようつとめた。

## 注

- <sup>1</sup> VA については桜井 (1996) および森 (1997) 参照。
- <sup>2</sup> VA と NPY に説かれるマンダラの配列については森 (1996, 1998, 2001) 参照。
- <sup>3</sup> VA の用語にしたがえば、一辺32マートラで囲まれた根本マンダラの内部。
- <sup>4</sup> Skt. *mūlamaṅḍalād bahiḥ sūtraṅalikhanaḥ sarvamaṅḍalasadhārāṅaḥ*.
- <sup>5</sup> 筆者によるものなどがいくつかある (1991a, 2003 etc.)。
- <sup>6</sup> 先駆的な研究として酒井 (1971) がある。田中 (1987) は、日本とチベットのマンダラを網羅的に解説した基本文献であるが、マンダラの墨打ちをはじめ本格的に紹介した研究としても重要である。Rontha (1973) は、秘密集会、チャクラサンヴァラ、ヴァジュラバイラヴァの3種のマンダラの墨打ちを、実際のプロセスにしたがって図示する。
- <sup>7</sup> Mori (1998: 3) の脚注3) 参照。

## 和訳

## 凡例

- ①以下に示したのは *Abhayākara*gupta, *Vajrāvalī nāma maṇḍalopāyikā* の第12儀軌「墨打ちの儀軌」(*sūtraṇa-vidhi*) の前半部の翻訳である。
- ②和訳は現存する11種のサンスクリット写本にもとづいて筆者が校訂したテキスト(未刊)によった。サンスクリット写本については森(1991: 57-59)を参照されたい。このうち、影印版が刊行されている Lokesh Chandra (1977) では、該当箇所は ff. 50-74に含まれる。
- ③和訳に際してはチベット訳テキストも参照した。チベット訳是北京版、デルゲ版、ナルタン版の3種の版本を用いた。北京版の該当箇所は以下の通り。TTP, Vol. 80, 89. 4. 5-94. 1. 5.
- ④内容の理解をはかるため( )内に説明の語句、原語などを入れた。内容に応じて段落をわけ、適切と思われる見出しを訳者が付けた。ただし、全体の見出しである「墨打ちの儀軌」は著者自身が示した用語である。翻訳上補った語句は[ ]内に入れた。
- ⑤ツォンカパの『真言道次第』(NRC)には、VAの内容に応じて関連する文献が多数紹介されている。訳注ではこれらを可能な限り示した。その場合、NRCの該当箇所を [NRC111. 5] のような形で示すが、これは北京版の p. 111, f. 5 を表す。また、VAの対応する箇所が広範囲にわたる場合、その始まりと終わりの語句を太字にし、括弧に入れて示す。
- ⑥訳注の中でVAの特定の箇所を指示する場合、<12. 1. 1>のように、本稿で用いる分段でそれを示す。

## 12. 墨打ちの儀軌

## 12. 1 糸の準備と基本線の引き方

## &lt;12. 1. 1&gt;

## つぎに

「誓約 (*samaya*, 三昧耶) を破ることを危惧する [阿闍梨] は、弟子にあらざるものを [マンダラに] 入壇させてはならない<sup>1</sup>。」

と説かれているので、[阿闍梨はマンダラの]東門に座り、はじめに二種の律義 (*saṃvara*) を与える後述の招請の儀軌 (*adhivāsanavidhi*) によってか、あるいははじめに阿闍梨の律義 (*ācāryasaṃvara*) を与える招請の儀軌のいずれかによって<sup>2</sup>、以前に [阿闍梨] 自身が灌頂を与えていない弟子で、門の阿闍梨 (*dvārācārya*) としてふさわしいものたちを招請せよ。これらは4人、あるいはそれだけのものがいなければ、3人、2人、ないしは1人であってもよい。「これらのものたちとは別に、同じように [招請された] 第5の弟子を、作業を指揮するもの (*karmavajrin*)<sup>3</sup>としなければならない」と別のタントラ経典に説かれている<sup>4</sup>。しかし、もし [第5の弟子が] いなければ、そのままよい。

## &lt;12. 1. 2&gt;

[阿闍梨は] このように弟子たちの招請のみを行い、招請のために導かれた尊格のマン

ダラ (devatāmaṇḍala) を供養し、智慧の糸 (jñānasūtra) などのために、マンダラの地面の上の虚空に [マンダラを] 覚知 (buddhi) によって導き、東を向いて金剛持 (Vajradhara) とのヨーガか、あるいはマンダラの主尊とのヨーガを実修し、[その尊の] 特徴を身につける。処女の紡いだ糸か、勇者が購入した糸を、5本ずつ5つに分け、[それぞれを] 5つの容器に入れ、白、黄、赤、緑、黒の染料で、マスタード (siddhārtha) の粉と5種の甘露を混ぜた芳香のする染料で1本ずつ染め<sup>5</sup>、左手の掌の上で、[1本ずつの] 指先から指の付け根までの間に置き、「ブルーム、アーハ、フリーヒ、カム、フーム」(brūṃ aḥ hrīḥ kham hūṃ)の文字か、「ブルーム、アーム、ジュリーム、カム、フーム」(brūṃ āṃ jrīṃ kham hūṃ)の文字か<sup>6</sup>、あるいは「オーム、スヴァー、アーハ、ハー、フーム」(oṃ svā āḥ hā hūṃ)の文字か、もしくはタントラ經典に応じた文字によって生起した五如来を完成し<sup>7</sup>、虚空に導かれたそれぞれの方角の如来を包摂した五如来の胸のところに、「ブルーム」字などから完成し、光でできた智慧の糸<sup>8</sup>を観察する。「オーム、アーハ、シャーシュヴァタ<sup>9</sup>よ、金剛の糸を我に与えよ。偉大なるマンダラの墨打ちのために、フーム<sup>10</sup>」と唱えながら、大日 (Vairocana) に請願せよ。名前を入れ替えて、宝生 (Ratnasambhava) などにも [請願せよ]。

「ジャハ」という文字から生じた黄色い月と太陽の形をとる両眼をそなえた [阿闍梨] は、「オーム、輝く視線の鉤を持つものよ、ジャハ」(oṃ dīptadr̥ṣṭyaṅkuśi jah)<sup>11</sup>と唱え、目をすばやく瞬かせ、まつげを引き上げて、鉤のような視線で大日などによって放たれたこれらの [知恵の糸] を引き寄せ、手に持った各色に染められた糸の中に導け<sup>12</sup>。それゆえ、これらの [糸] は大円鏡智などの五智を本質とするのである。大円鏡智などの智慧はそれぞれ [他の] 四智を随伴するので、また [五つの] それぞれの種子から五如来 (pañcatathāgata) が拡散 (spharāṇa) と収斂 (saṃharāṇa) をするので、25に分かれるのである<sup>13</sup>。「[5種の] 智慧それぞれが20尊ずつのマンダラの本質を持つため、百に分かれるのである」と、あるところに説かれている<sup>14</sup>。

### <12.1.3>

つぎに、糸を手は大日の姿か、もしくはアムリタクンダリン (Amṛtakuṇḍalin) などのすべての儀礼行為の尊 (sarvakṛt) の姿をした弟子<sup>15</sup>とともに、[阿闍梨は] 5色ずつ5本の糸をそれぞれ1本ずつに結え。そしてこのようにして結った5本の糸から1本の糸にする。「オーム、すべての存在物は互いに随伴するものである。すべての存在物は交互に随伴するものである。すべての存在物は究極的に随伴するものである。オーム、アーハ、フーム」<sup>16</sup>と唱えながら糸が結えたならば、師と弟子は左手の人差し指の方から、[親指以外の] 4本の指の内側に入れて、手の甲の方に出し、ふたたび [同じように] 入れて出して [二重で握り]、その [両者の] 金剛拳の人差し指の背の方を地面に固定し、マンダラの2倍

の長さになるようにして<sup>17</sup>、端の残りの部分は捨てる。1ヤヴァ (yava) より20分の1ヤヴァ長いのが阿闍梨のヤヴァの長さで、[糸の] 太さである。7ヤヴァが1アングラ (aṅgula) であると『俱舎論』(Abhidharma[kośa]) に説かれているからである<sup>18</sup>。輪 (cakra) の8分の1が1バーガ (bhāga) で門の大きさ、[その] 20分の1が [糸の] 太さであるという説は、24アングラすなわち1ハスタ (hasta) のマンダラの場合のみである<sup>19</sup>。2ハスタなどのマンダラの場合、それから考察して太さを理解せよ。「全体のマンダラが6ハスタの場合、糸は少しだけ短い長さに作るべし<sup>20</sup>。別の場合は類推して作るべし」とアーナンダガルバ (Ānandagarbha) などが [説いている]<sup>21</sup>。

結び終わったならば、[自分の] 前の地面で、香水と五甘露 (pañcāmṛta)、パンチャガヴァ (pañcagavya)<sup>22</sup>で湿らせ、さらに内側に3つの文字<sup>23</sup>を含む [糸] を、香水を塗った金などの清浄な容器の中に置き、香、花、線香によって称賛し、手で触れ、アマリタクンダリンのマントラを唱えて守護し<sup>24</sup>、右と左の目に、「マ」(ma) と「タ」(ṭa) の文字から [生じた] 太陽と月を観察し、前と同じように<sup>25</sup>、「金剛の視線よ、マッタ」(vajradṛṣṭi mat)<sup>26</sup>と唱えて [糸を] 堅固にし、すべての儀礼行為のマントラを唱えた水とマスタードと香水を塗り、金剛杵を持った右手で触り、「オーム、金剛の三昧耶よ、糸を超えるなかれ、フーム」(oṃ vajrasamaya sūtram mātikrama hūṃ)<sup>27</sup>と唱え、3つの文字<sup>28</sup>を108回唱えて [糸を] 招請せよ<sup>29</sup>。

#### <12.1.4>

「オーム、すべてを浄めるものよ、フーム、パット」(oṃ sarvasaṃśodhani hūṃ phaṭ) というマントラとともに、ふたたびすべての瓶の水をマンダラ [を描く] 地面に撒いて<sup>30</sup>、清浄になった [地面] に香水を塗る。周囲には花を撒く。空中にある描かれるべきマンダラ (likhanīyamaṇḍala) に向かい、闍伽水 (argha) をはじめに供えて、プージャーを行い、礼拝する<sup>31</sup>。自分自身はその [マンダラの] ヨーガをし、助手が大日か、あるいは [アマリタ] クンダリンなどのすべての儀礼行為の尊の姿をすると想起する<sup>32</sup>。自分とその [助手の] 左右の目に「ジャハ」(jjaḥ) の文字から生まれた黄色く輝く月と太陽を念じる<sup>33</sup>。[阿闍梨は] 金剛歩 (vajrapada)<sup>34</sup>をしながら左の金剛拳 (vajramuṣṭi) で握ったその糸を臍の位置に保ちつつ、そのように握った糸をその助手 (uttarasādhaka) に向かって「ジャハ、ジャハ、ジャハ」という三つの「ジャハ」の文字と、さらに「ジャ」の文字によって<sup>35</sup>放ち、助手も「ジャハ、ジャハ、ジャハ」という三つのジャハの文字によって<sup>36</sup>手繰り寄せる。そのように向かい合って立ち、[阿闍梨は] 東を向いて西に立ち、さらに北を向いて南に立ち、2本の梵線 (brahumasūtra) を「臍」(nābhi) で等しくなるように<sup>37</sup> [マンダラの] 内部に墨打ちしながら<sup>38</sup>、金剛杵を持った右手の親指と人差し指で糸を受け取り、指をはじいて音を出せ。墨打ちをするときにはつねに「オーム、金剛の三昧耶よ、糸を超えるな

かれ、フーム、フーム、オーム、スヴァー、アーハ、ハー<sup>39</sup>と唱えよ。この糸の音によって、虚空に遍満する諸如来を驚発せよ。彼らがお越しになり、糸の中に入るのである。なぜなら、この音は「汝らにとって衆生への利益の時である。ここへ来たれ<sup>40</sup>」という意味でできているからである。阿闍梨と助手は「マンダラの土地の」まわりを右回りに回り、すべての方角が同じ長さになるように確認せよ<sup>41</sup>。

### <12.1.5>

空中の2本の糸のように、地面にも梵線を、糸を持って均等におろした両手で墨打ちしなければならない。さて、まずはじめに1ハスタの円<sup>42</sup>の中心に1 ヴィタステイ (vitasti)<sup>43</sup>の杭をたて、その影の先端が日の出と日没の時に円に入るところ2カ所に印を付ける(図1)。東と西のこの上に糸を固定し、ふたつの円を描くと「魚」(matsya)になる。その頭と尾の端に付けた印が北と南で、その上に糸を固定し、さらに別の円をふたつ描け。[円が] 交わったところでも四方で四つの印を付け(図2)、その上に[糸を固定し]、四つの円を描け。つぎに四方において、魚の頭と尾の midpoint に糸を固定し、火炎輪 (raśmimālā)の端<sup>44</sup>まで2本の梵線を(図3)、[阿闍梨は] 左足を半跏 (ardhaparyāṅka) にし、右足は地面にたて、弟子はその反対にして坐るか、場合によっては後ろ向きで移動し、左の金剛拳で糸を手にして、空中に糸を放すのだと念じながら、墨打ちせよ<sup>45</sup>。他の線を墨打ちする場合にもこのように[念ぜよ]。

悪しき徴候のものには成就はないであろう。糸が切れれば師が減ぶ。[糸が] 短い場合や長すぎる場合、病気になる。方向が混乱すると弟子も狂う<sup>46</sup>。

と、知って、[もしそうなったら] 救済の儀礼 (pratividhāna) を行い、

もし[助手が] 墨打ちに巧みではない場合や、また同様に助手がいなときは、杭 (kīlaka) に[糸を] 結んで墨打ちせよ<sup>47</sup>。

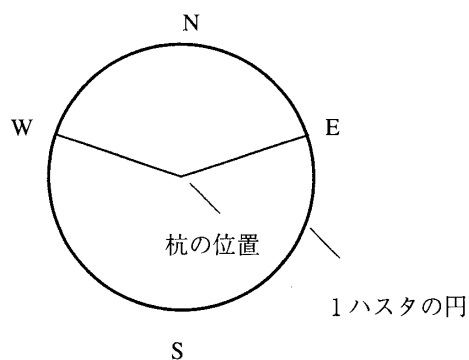


図1 東西の方位の確定

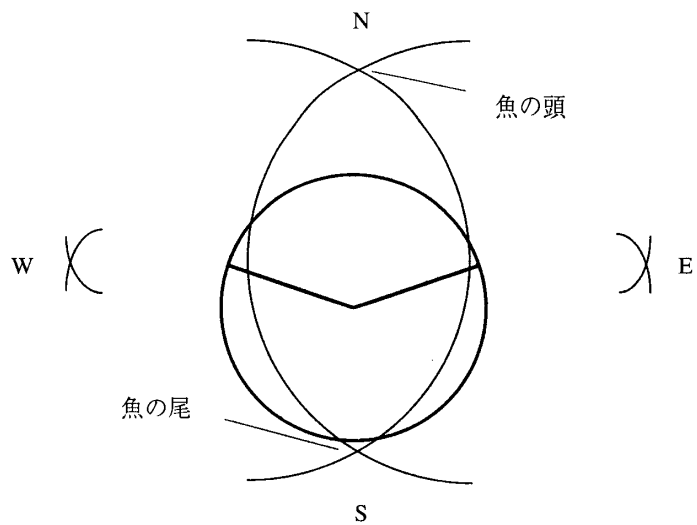


図2 マンダラの方位の確定

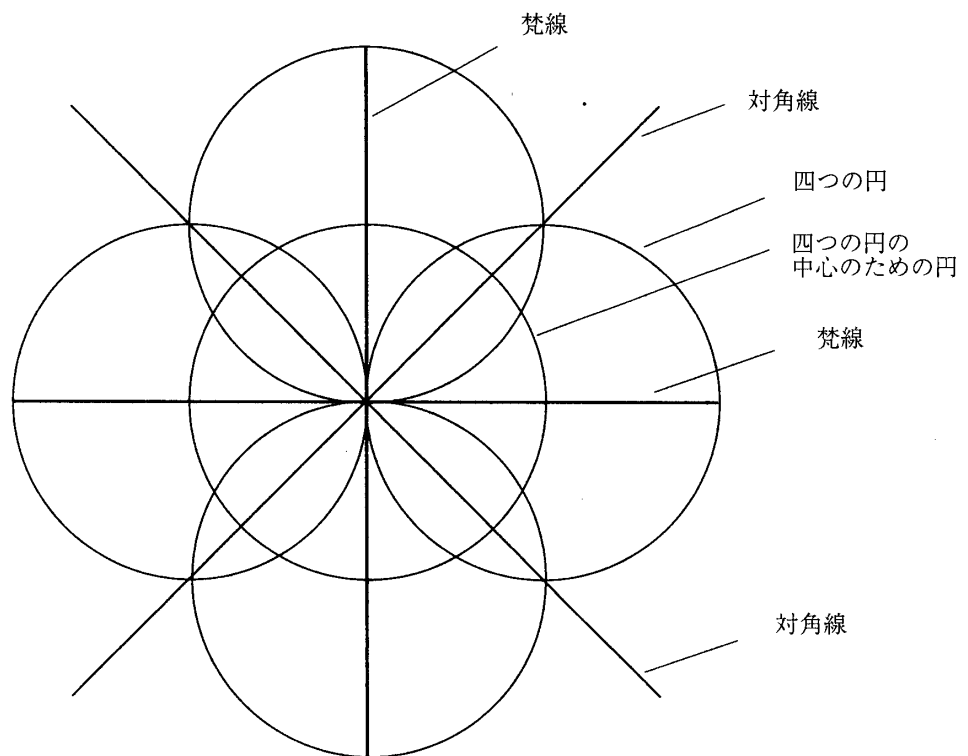


図3 四隅の確定とマンダラの基本線



## &lt;12.1.6&gt;

南東の隅に〔阿闍梨が〕立ち、北西の隅に向かって対角線 (koṇasūtra) を、また南西の隅に立ち、北東の隅に向かって対角線を〔打つ〕。この両者はそれぞれ門の17の長さがある<sup>48</sup> (図3)。つぎに五つの円を消す<sup>49</sup>。梵線のみは墨打ちのためにマンダラの2倍の長さの線とするといわれている<sup>50</sup>。この場合の「マンダラ」とは周囲の部分 (parikara) を含む根本マンダラ (mūlamaṇḍala) のことで、羯磨杵のヴェーディカーの端 (viśvavajravedikānta)<sup>51</sup> と接し、根本線 (mūlasūtra) の外の8マートラ (mātra)<sup>52</sup> までの48マートラ分である<sup>53</sup>。その外には順に12、2、2、2、2、4マートラのトーラナ (torāṇa)、法輪 (dharmacakra)、〔羯磨杵の〕鈷 (śūkā)、蓮弁 (abjadala)、金剛杵輪 (vajrāvalī)、火炎 (raśmi) のマートラで<sup>54</sup>、片側で24マートラ、もう片側で同様に〔24マートラ〕合計48マートラになるのである<sup>55</sup>。そのため〔周囲の部分を含む根本マンダラの一辺の2倍の〕96マートラの糸になるのである。

また

「各方角への割り当てを等しく知り、マンダラの2倍の長さを東西の長さにした梵線を墨打ちせよ。」<sup>56</sup>

と説かれる。別のところでは

「この場合、マンダラの2倍が必ずやマンダラの土地であると理解されなければならない。インドラ (indra) とヴァルナ (varuṇa) の方角 (=東と西) に、マートラに応じた長さのある糸を伸ばす。」<sup>57</sup>

と説かれている。

〔羯磨杵の〕鈷と火炎の両者が〔順に〕1マートラと3マートラ、あるいは2マートラと2マートラの場合、線 (=梵線) は92マートラになる。火炎の端のマンダラから4マートラ分の線が余分になる<sup>58</sup>。「これは握るための部分である」というのは正しくない<sup>59</sup>。

「1ハスタから始め、千ハスタに至るまで」

と説かれているので<sup>60</sup>、千ハスタの根本マンダラの8分の1の〔大きさに相当する〕門が、さらに4分の1となったもの、すなわち31.25ハスタが1マートラとなる。その4つ分で125ハスタの線が余りとなる<sup>61</sup>。しかし、蓮弁と金剛杵輪がそれぞれ1マートラずつであるというのも正しくない<sup>62</sup>。そのため、このたぐいの別の説も、側面から垂直に門の3倍のトーラナがあるという説に対して、口伝との不一致ということになることを、知識ある者たち (bahuvid) は述べている<sup>63</sup>。

## &lt;12.1.7&gt;

この場合、1ハスタなどの大きさの円が、四方で、それと同じ長さの4本の根本線と接する<sup>64</sup>。そのため、北を向いて南東の隅に立った阿闍梨は、円の大きさの東の根本線を墨

打ちせよ。南を向いて北西の隅に立って、西の [根本線を]、そこに立ったまま東を向いて北の [根本線を]、ふたたび南東の隅に立って西を向いて南の [根本線を墨打ちせよ]<sup>65</sup> (図4)。

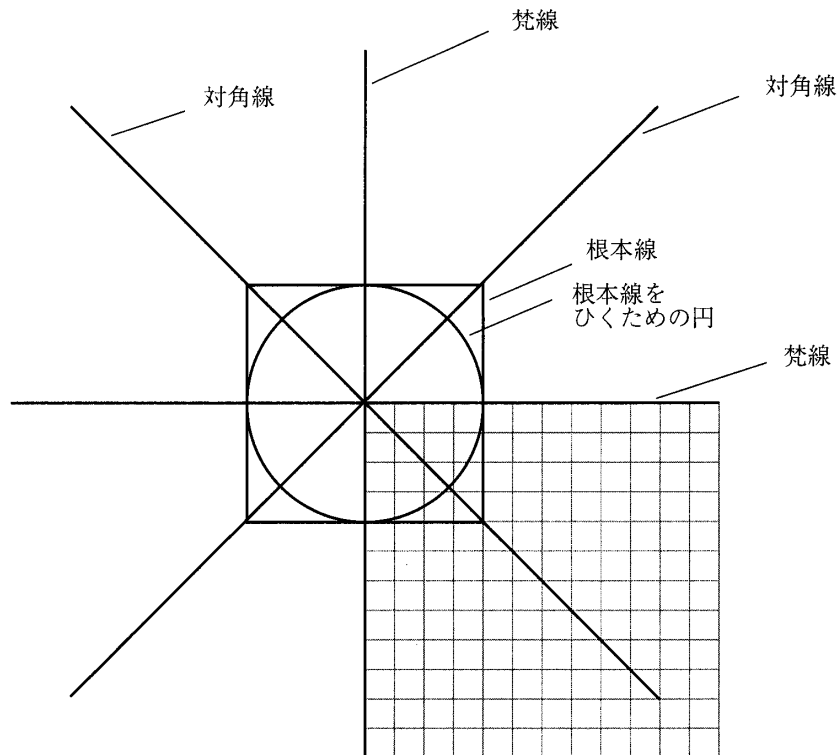


図4 根本線とそのための補助線 (一目盛りは4 マートラ)

これもまた『ヴァジュラパンジャラ [タントラ]』(Vajrapañjara[tantra]) にそのように説かれる。

「はじめに梵線によって、2番目に対角線によって、3番目には四方の側面(pārśva)に4本の線 (=根本線) を墨打ちせよ。」<sup>66</sup>

この [根本] 線1本の8分の1が1バーガ (bhāga)、すなわち「門」(dvāra)<sup>67</sup>であり、門の4分の1が1マートラである。そして梵線の左右の各2単位分の根本線の部分4マートラがそれ (=門) である。そこにある梵線の両側の2本の根本線 [4マートラ分] については、

「そして<ヒーヒ> (hīḥ) の字の忿怒の視線 (krodhadṛṣṭi) によって門として分割せよ」<sup>68</sup>

という至言があるので、世尊の姿をしたものは「解脱の門を閉ざそうとする妨げを消すのだ」という確信によって、「ヒーヒ」の文字によって左右の目に月と太陽を生み出し、この忿怒の目によって周囲を見渡しながらか、「ヒーヒ、ヒーヒ」(hīḥ hīḥ) と声を発しながら

[根本線の中心部分4単位分を] 消す<sup>69</sup>。

## 12.2 内部の線

### <12.2.1>

つぎに根本線の外に、順に1、2、1、2、1、1マートルずつ取り、6本の線(*a*~*e*)が対角線から斜めに伸びている<sup>70</sup>(図5)。このうち、はじめのふたつはラジャス(*a*)とヴェーディー(*b*)の区画である<sup>71</sup>。両者の先端に[垂直に]接した2マートルの線(*b'*)<sup>72</sup>をそなえ、梵線から3マートルはなれて置かれる。三つは宝(*c*)と瓔珞(*d*)とバクリー(*e*)の区画で、[梵線から]8マートル離れている。一方、4番目の線(*f*)はもう一方の対角線まで伸びている<sup>73</sup>。

つぎに、ヴェーディーの線(*b*)から[垂直に]伸びる4本の線(*g, h, i, n*)について<sup>74</sup>。このうちのひとつはアンチャラの区画(*g*)で、三本の線(=*c, d, e*)の端に垂直に接している。その横に1マートルずつ離れて3本の線(*h, i, n*)があり、トーラナの柱(*h*)、アンタラーラ(*i*)、ラジャスの区画(*n*)<sup>75</sup>である。これら4つのうち、はじめの3つの長さは5マートルで、4番目は4マートルである。この中で、マンダラ<sup>76</sup>とトーラナの両者の中間部分(*antarāla*)の区画は、アンダパッティカー(*andhapattikā*, 暗黒の帯)、アンダカーラパッティカー(*andhakārapattī*, 闇の帯)、ポーリー(*pollī*)とも呼ばれる<sup>77</sup>。

つぎに梵線の横に[梵線から]2マートル離れて、根本線から4マートルの門扉(*j*)がまっすぐに伸び、[根本線と]水平に2マートルのカポーラ(*k*)が伸び、両端が垂直に接し、上に向かって伸びた2マートルのパクシャ(*l*)が1本ある。その[パクシャの]端から水平に伸び、梵線のもう一方の横にあって同じように垂直に接する端にまで至る8マートルのシリーズチャカの線(*m*)がある<sup>78</sup>。同様に、その隣にある線の端から、もう一方の隣の線の端まで、10マートルを占める1本の線(*n*)がある。スカンダの区画(*skandhabhūmi*)、シリー(*śilī*)をともなったアーサーラ(*āsāra*)の[区画]、あるいはシリーの上にある五種のラジャス(*pañcarajas*)<sup>79</sup>のための線である。その外側の1マートル分はマンダラとトーラナの間の中間部分である<sup>80</sup>。

### <12.2.2>

これはつぎのように説明される。

「門は輪(*cakra*)<sup>81</sup>の8分の1(=4マートル)で、[これに]ヴェーディカー(*vedikā*)は含まれないとお考えになった<sup>82</sup>。門扉(*j*)は門の大きさ(=4マートル)で、尊格の帯(*devatāpattikā*)<sup>83</sup>も同様である。ヴェーディー(*b*)はあまねく門の半分(=2マートル)で、カポーラ(*k*)とパクシャ(*l*)も同様である。瓔珞半瓔珞

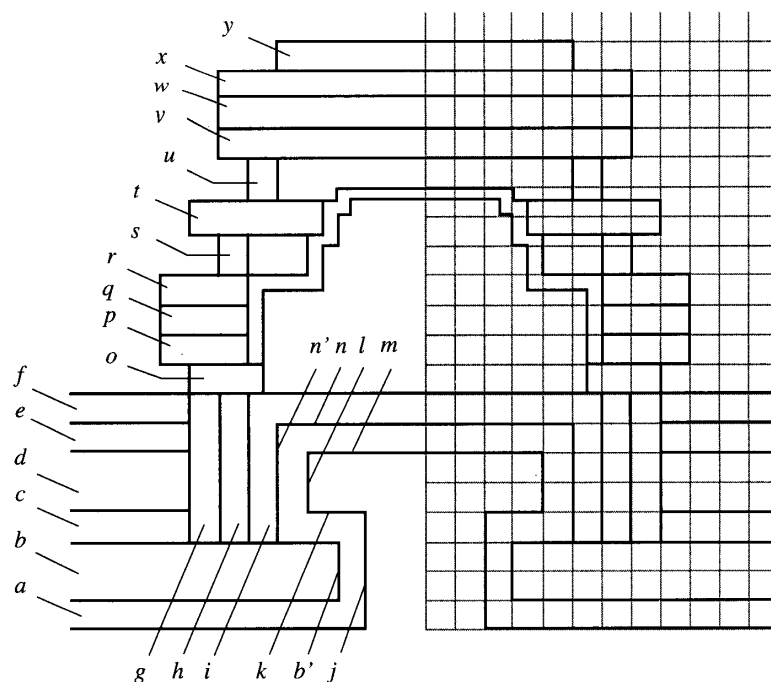


図5 樓閣の門、外壁、トーラナ（第1のタイプ）（一目盛りは1マートラ）

|   |           |                |                          |
|---|-----------|----------------|--------------------------|
| a | ラジャス      | rajas          | tshon                    |
| b | ヴェーデー     | vedī           | stegs bu                 |
| c | 宝         | ranta          | rin po che               |
| d | 瓔珞半瓔珞     | hārārdhahāra   | dra ba dra phyed         |
| e | バクラー      | bakulī         | rgya phubs               |
| f | 外廊        | kramaśīrṣa     | mda' yab                 |
| g | アンチャラ     | añcala         | dar dpyangs              |
| h | 柱（トーラナの柱） | stambha        | ka ba                    |
| i | 中間部分      | antarāla       | bar                      |
| j | 門扉        | niryūha        | sgo khyud                |
| k | カポーラ      | kapola         | 'gram                    |
| l | パクシャ      | pakṣa          | logs                     |
| m | シリーズーチャカ  | śilisūcaka     | gdung mtshon par byed pa |
| n | スカンダ      | skandha        | ya babs                  |
| o | 金         | suvarṇa/svarṇa | gser                     |
| p | バクラー      | bakulī         | rin po che'i shar bu     |
| q | 宝         | ratna          | rin po che               |
| r | ひづめ       | khura          | rmig pa                  |
| s | アンダカーラ    | andhakāra      | mun po                   |
| t | ヴァランダ     | varaṇḍa        | varanda                  |
| u | アンダカーラ    | andhakāra      | mun po                   |
| v | バクラー      | bakulī         | rin po che'i shar bu     |
| w | 宝         | ratna          | rin po che               |
| x | ひづめ       | khura          | rmig pa                  |
| y | 外廊        | kramaśīrṣa     | mda' yab                 |

(hārārdhahāra)、月 (candra)、太陽 (arka)、花輪の帯 (sragdāmapattikā) も [2 マートル] <sup>84</sup>。根本線の区画の外側であるラジャスの区画 (a) はその半分 (= 1 マートル) である <sup>85</sup>。」

尊格の帯とは根本線の内側である。一方、ヴェーディーは「陀羅尼の帯」 (dhāraṇīpattī) 「舞踊の帯」 (nartanapattī) と呼ばれる。この場合「水平に伸びているのがカポーラで、垂直に伸びているのがパクシャである」 <sup>86</sup> というのは口伝ではない。説かれているのは

「門と等しく門扉が [根本線に対して] 垂直にある。門の半分のカポーラが水平にある」

ということである <sup>87</sup>。

中間部分の高さは 5 マートル、幅は門三分の大きさ (= 12 マートル) である <sup>88</sup>。

### <12. 2. 3 >

ナーガブッディ様 (Nāgabuddhipāda) たちは中間部分の帯とスカンダの帯を望まれず、パクシャの 2 本の線に接する線をシリ (sīlī) とお考えになり <sup>89</sup>、これは

「門は輪 (cakra) の 8 分の 1 (= 4 マートル) で、尊格の帯 (devatāpattikā) も同様である <sup>90</sup>。門扉は門の大きさ (= 4 マートル) で、カポーラとパクシャも同様である。ヴェーディーはその半分 (= 2 マートル) となり、ヴェーディーの半分 (= 1 マートル) がラジャス <sup>91</sup> の区画である。瓔珞はヴェーディーの大きさ (= 2 マートル) となり、宝の区画はその半分 (= 1 マートル) である。バクリー、外廊、外の柱なども同様である。」 (図 6)

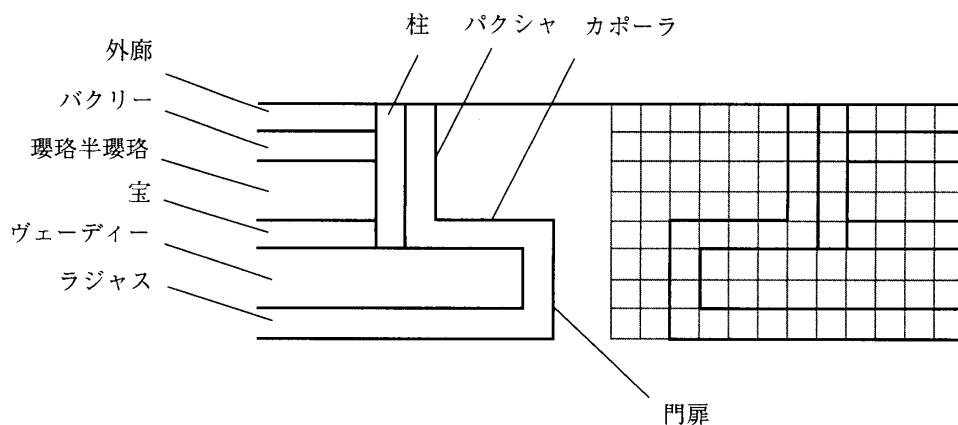


図 6 ナーガブッディ所説の門

と、他の経典で説かれていることを [『マンダラ儀軌二十』の中で] おっしゃたからである <sup>92</sup>。

この説に関して、アーサーラ (āsāra) と外廊のために、パクシャの2本の線に接する線の外側に、1 マートルラ離れて線が1本あることを規定していても、それを説明する言葉はここにはないので、自然に思いついたのであろうが、「根本線の外側8 マートルラ分の領域で囲まれているのが、周囲の部分を含む根本マンダラである」と偉大な学者 (mahāratha 大車) たちがさかんに説いていることに矛盾すると認めなければならない<sup>93</sup>。

装飾のために宝とバクリーの帯の上に外廊の帯が作られるというのであれば、作りなさい。これについて、どうしてわれわれが反対しなければならないのか。門扉、カポーラ、パクシャの長さが等しいという説と等しくないという説の両者が、さまざまな経典の中で世尊によって説かれている<sup>94</sup>。しかしこの場合、8 マートルラ目の外廊によって楼閣が装飾されるようには、バクリーによっては [装飾] されず、もし外廊がなければ「上部が切られた」<sup>95</sup>ようになってしまう<sup>96</sup>。大寺院 (mahāvihāra) などで見受けられる<sup>97</sup>。

#### <12. 2. 4 >

この場合、描かれるマンダラ (lekhyamaṇḍala) では外廊はアンチャラの線までであるが、観想上のマンダラ (bhāvyamaṇḍala) ではパクシャの上までである<sup>98</sup>。「外廊はパクシャを含む」という『ヴァジュラマラー・タントラ』(Vajramālāntara) の言葉があるからである<sup>99</sup>。[描かれるマンダラでは] シリーの裏側に柱を2本描いていないが、観想上のマンダラでは [そこに柱があると] 理解せよ<sup>100</sup>。

「四角で4つの門をそなえ、8本の柱で飾られる」

という口伝があるからである<sup>101</sup>。これはマンダラの中の8本の柱をおっしゃったのではない。これらはサンヴァラなどのマンダラにはないが、「8本の柱で飾られる」というこの特徴も、すべてのマンダラにあてはまるからである<sup>102</sup>。しかし、側面にある柱 (pārśva-stambha) はトーラナのみ属する<sup>103</sup>。したがって、門の根元から上に向かって門扉が伸びていると考えている者たちは、[仏の] お言葉を理解していない者たちである<sup>104</sup>。

ラジャスの部分には宝、瓔珞半瓔珞、バクリー、外廊が、この順番で上に向かって積み立てられ、装飾が分割されていた。バクリーは留め具 (sajjaprānta, Tib. bya 'dab)<sup>105</sup>にかけられていると理解せよ。あるところに「バクリーの7 マートルラ目には宝が描かれるべきである」と説かれている<sup>106</sup>。

このような途切れた線 (kharvasūtra, Tib. thig thung)<sup>107</sup>を好まないものは、対角線まで根本線の外側に1、2、1、2、1、1 マートルラ水平に取り、6本の線を引き<sup>108</sup>。根本線から [垂直に] 伸びた7本の線も6番目の線まで梵線の右側に [引く]<sup>109</sup>。このうち1本目は [梵線から] 2 マートルラ離れる<sup>111</sup>。それ以外は1 マートルラずつ離れる。同様に [梵線の] 左側にも引く。前の段階で述べた [必要な線である] 途切れた線以外の線は消す<sup>112</sup>。

## &lt;12.2.5&gt;

〔トーラナの〕柱の上にはトーラナがあり、〔高さは〕12マートルである。この場合、柱の先から外に向かって11本の線がある。これについては

「トーラナは門の3倍（=12マートル）で、これはまた11の帯である。」と説かれているからである<sup>113</sup>。その内容は金、バクリー、宝、ひづめ、アンダカーラ、ヴァランダ、アンダカーラ、バクリー、宝、ひづめ、外廊の各帯である。このうちアンダカーラのふたつの帯はそれぞれ高さが1.5マートルである（図5）。〔残りの〕9つの帯はそれぞれ1マートルずつである。「ここには金（svarna）の帯はなく、アーサーラ（āsāra）の帯がある」というものもある<sup>114</sup>。

あるいは、バクリー、宝、ひづめ、金（svarna）、マカラ、カーンチャナ（kāñcana, Tib. gser）、ひづめ、宝、ひづめ、金、外廊の帯で、これらの高さは、1番目と2番目が1.5マートル、3番目が1マートル、4番目が0.5マートル、5番目が1.5マートル、6番目が0.5マートル、7番目が1マートル、8番目が1.5マートル、9番目が1マートル、10番目が0.5マートル、11番目が1.5マートルである（図7）。〔以上で〕これらと、上述の11の帯についての高さが説かれた。

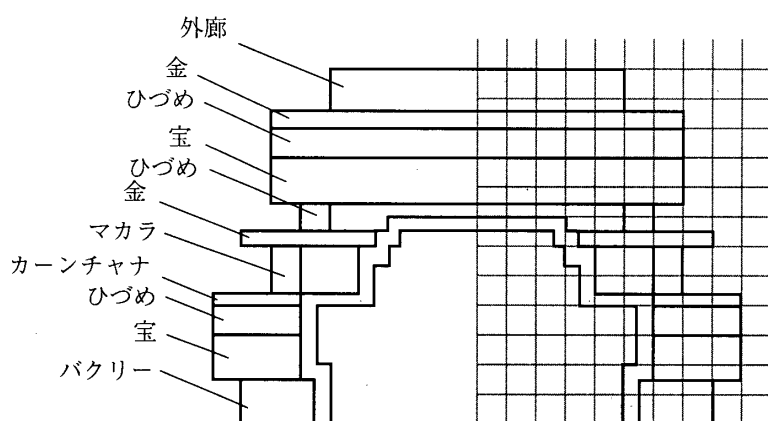


図7 トーラナ（第2のタイプ）

この場合、梵線の右と左に5.5マートル離れてはじめての帯が2.5マートルである<sup>115</sup>。その上に第1の線が3.5マートル。6マートル離れて第2、第3の線が3マートル。4マートル離れて第4の線が5マートル。3.5マートル離れて第5の線が4.5マートル。3マートル離れて第6の線が5マートル。第7以下の4本の線は7マートルである。第11の線は5マートルである。

ここで、第5の帯は水平方向は3.5マートルの線が上の部分である<sup>116</sup>。第7の〔帯の〕線には下に3マートル、上に6マートルである。すべての帯はそれぞれ外側の端に線を1

本ずつ適宜、垂直に [引く]。内側の端にも [適宜、垂直に引く]。第1の線の [梵線寄りの端から外側に向かって] 0.5マートラ離れたところに、上向きの線を [引く]<sup>117</sup>。これはつぎの線と順につながっているので、1本の折れ曲がった線に見える。適宜、美しく描け。その内側には、宝などを描くために、0.5マートラ離れて同様に折れ曲がった線を1本 [引く]。

[はじめの帯を] アーサーラの帯とする立場の場合、これは [水平の長さが] 16マートラとなる<sup>118</sup>。しかし、それらが

「王 (nr̥pa=16)、誤り (doṣa=18) が三つ、太陽 (surya=12)、王、方位 (dīś=10)、マヌ (manu=14) が三つ、方位、これらが順にトーラナの帯の水平の長さである<sup>119</sup>。」という考えでは、中間部分 (antarāla) の大きさには [実際には] バクリー (p) から [ヴァランダ (t) まで] の層はないので、「このバクリーは18マートラである」などと説かれていることが、どうして適当であるかを考察せよ<sup>120</sup>。

## <12. 2. 6 >

上のマカラの口からあふれるパトラチャター (patracchatā, Tib. mu tig gi chun 'phyang)<sup>121</sup>なども適宜、飾る。トーラナの上の梵線上には12輻の法輪 (dharmacakra) が2マートラを占める。

「輪 (cakra) は8本の輻 (ara) をそなえ、周囲 (nemika) が5バーギカ (bhāgika)<sup>122</sup>である」

とあるところに説かれている<sup>123</sup>。その座は蓮華と月輪で、トーラナの11番目の帯の上にある。

座の左右にある外廊には雄鹿と雌鹿が [法] 輪から0.5マートラだけ離れて輪を見ながら坐る。1マートラ分の首を含む頭をあげ、目を輪の先端に向けているように描け。なぜなら『ヴィマラプラバー』 (Vimalaprabhā) の中に

「輪の右と左には雄鹿と雌鹿がいる」<sup>124</sup>

と説かれているからである。

「外廊はなく、その帯には雄鹿と雌鹿がいる」というものもある<sup>125</sup>。この考えは聖ナーガブッディ様による

「瓶 (kumbha) と柱の上に門の3倍のトーラナが立っている。両側には鈴 (ghaṇṭā) の音の響くふたつの外廊をそなえている。」<sup>126</sup>

という教え (āgama) と矛盾する。この書では [法輪の] 座の横にいる雄鹿と雌鹿の尻尾の外の両側に、ふたつずつの外廊があると説かれた。それゆえ、この考えの場合、雄鹿と雌鹿は外廊にはいないのである<sup>127</sup>。

[法] 輪の外側の2マートラのところには羯磨金剛杵の鉤の先端があり、輪の輻のあい



だから見えている。鋤が14マートラであるという考えの場合、12バーギカ<sup>128</sup>の羯磨金剛杵の中央部分は、周辺部を含むマンダラの基礎部 (adhikaraṇa) で12バーギカを占める部分にあたるが<sup>129</sup>、[羯磨杵の] 各方角の鋤は蓮華の花芯の端までを占めるので、「門のバーギカ4つである」とはならなくなる<sup>130</sup>。この考えはすでに考察した<sup>131</sup>。

### <12. 2. 7>

下が独鋤で上が五鋤で、フーン字から生じたカディラ樹 (khadira) のキーラカ (kīlaka) <sup>132</sup> をマンダラの中心に観想し、突き刺しのマントラ (kīlanamantra) を108回唱え、打ち込みのマントラ (ākṣānamantra) とともに [実際のキーラを] 金剛の槌 (vajramudraga) で打つ<sup>133</sup>。96マートラの糸を二重にして、これに留め<sup>134</sup>、北東の隅からはじめ<sup>135</sup>、[羯磨杵の] 鋤の先端の外側で、蓮華の雄しべ (padmakeśara) の円を右回りに引く<sup>136</sup>。

その外側に2マートラ分の蓮弁の輪 (padmadalāvālī) の円で、花卉に接する「法源の部分を表す線」(dharmodayāṃśāsūcaka) を [引く]<sup>137</sup>。「サンヴァラ・マンダラなどの特定のものには法源 (dharmodaya) は観想されないが、その場合でも法界 (dharmadhātu) の中にあるので、法界を表すのがこの線なのである」とあるものは述べる<sup>138</sup>。「これは鉄囲輪 (cakravāḍa) の形をしている」と別のものは述べる<sup>139</sup>。

その外側に2マートラ分の金剛杵の輪 (vajrāvālī) の円があり、厚く堅固な鉄囲輪の形をとる。金剛杵の帯には三鋤杵、あるいは五鋤杵、あるいは羯磨杵のいずれかを教え (āgama) に従って描け。

その外側には4マートラの火炎 (raśmi) の区画の円があり、火炎の層の大きさが同じになるように [引く]<sup>140</sup>。「火炎輪の外側に鉄囲輪を丸く描く」とアーナンダガルバ (Ānandagarbha) は [説く]<sup>141</sup>。そのため、その場合ラジャスの線<sup>142</sup>は作られない<sup>143</sup>。

トーラナの横にはアンチャラの帯 (g) の上に、マカラの口からあふれ出た羯磨杵の鋤 (viśvavajrāra) があり、わずかに横に伸び<sup>144</sup>、外側に出て、中心の幅が3マートラ、高さが16マートラである<sup>145</sup>。羯磨杵が五鋤杵であるという説の場合、鋤の横に別の鋤がある<sup>146</sup>。

トーラナの柱は外壁 (bhitti)<sup>147</sup>の線から出て、7マートラ分であるという説は適当ではない。楼阁より少しだけ離れたところで、トーラナの柱は1本ずつ四角のヴェーディーの上に乗っているからである<sup>148</sup>。平らな場所に乗っているため、ヴェーディーに接しているように見える。そのため、それら [トーラナの柱は] ヴェーディーの外側に描くのが適当なのである<sup>149</sup>。同様に垂直方向の中間部分の帯は、高さが門ふたつ分 (= 8マートラ) より4分の1マートラ短いというのは誤りであると理解せよ<sup>150</sup>。

以上、このひとつの説を説いた<sup>151</sup> (図8)。

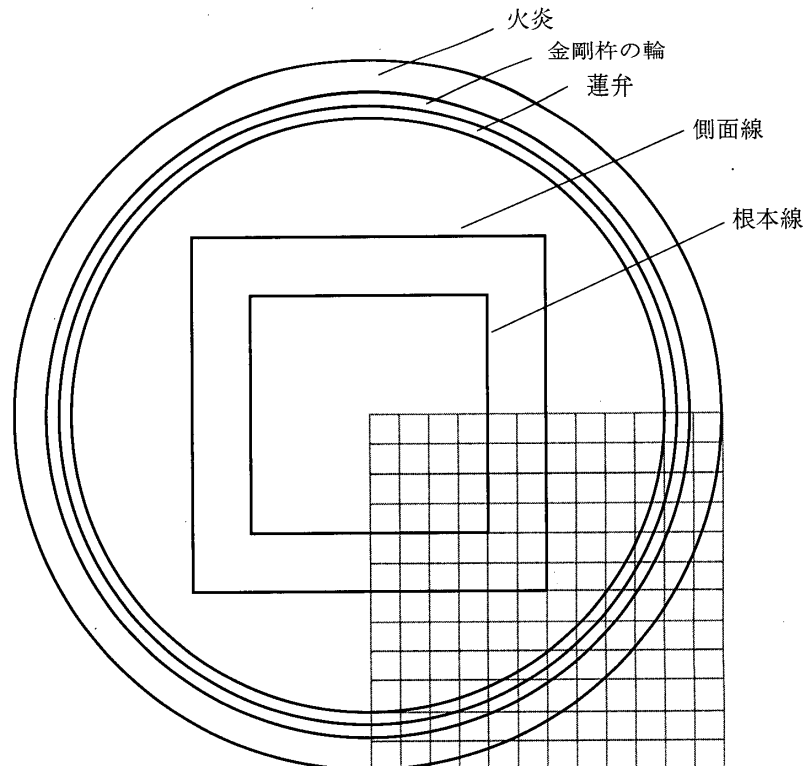


図8 マンダラの基本線（第一説）  
（一目盛りは4 マートル）

### 12.3 第二の説

#### <12.3.1>

4本の根本線によって区切られた根本マンダラの2倍の長さの糸を〔準備し〕、それで64マートルの梵線を引け<sup>152</sup>。また同様に

「梵線の各側面（pārśva）に大部（mahābhāga）8つで印をつける<sup>153</sup>。これらの大部をそれぞれ4小部（krśa）に〔分ける〕。梵線のそれぞれの横には32マートルの〔根本線が〕できる。門の大きさが1大部で、4分の1が小部、8分の1が寂静（śiva）である<sup>154</sup>。」

また別のところには

「清浄な正方形を作ったならば<sup>155</sup>、マンダラの2倍の長さ以上<sup>156</sup>で、つぎに白い糸を作り、助手<sup>157</sup>をともなった〔阿闍梨〕は、みずから、白梅檀（śvetacandara）で溶いた米の粉に〔糸を〕浸せ<sup>158</sup>。輪（cakra）ができたなら、その大きさの2倍の清浄な2本の梵線を引け<sup>159</sup>。その半分で根本線を〔引け〕<sup>160</sup>。」

と説かれる。

### <12. 3. 2>

梵線の先端の外には、蓮華の雄しべ(abjakeśara)、蓮華の花弁(abjadala)、金剛杵(kuliśa)、火炎の環(kiraṇamālā)の各円の線がある<sup>161</sup>。これは

「鉄圀輪の内側も、長さが門の16(=64マートラ)である<sup>162</sup>。」

と説かれる。この場合、[蓮華の]雄しべの線からはじまる部分が鉄圀輪と考えられている。

これはどのようなかといえ、蓮華の雄しべ、花弁、法源(dharmodaya)は金剛杵輪(vajrāvalī)とつながっているのではない。金剛杵の輪(vajravalaya)の姿をした金剛墻(vajraprākāra)は鉄圀輪と呼ばれる。これはまた同様に、聖ナーガブッディ様が説いておられる。

「先端が金剛杵をしたトーラナがあり、その外側に鉄圀輪がある。金剛の環(vajramālā)にして妙なる光(suraśmi)などを[そなえる]」<sup>163</sup>

この中で金剛の環(vajramālā)こそが鉄圀輪であり、[しかも]妙なる光などであるとはっきりと述べておられる。それならば輪(valaya)と同じものである、雄しべなども鉄圀輪のごとくであり、鉄圀輪と認められる。これら[雄しべから火炎輪まで]が鉄圀輪に含まれているというのが適切であると理解すべきである。[偈の中で]「その外側に」と説かれているからである。もし、このようであれば、うまく説かれている<sup>164</sup>。

### <12. 3. 3>

「そのため[ナーガブッディの]この言葉からすれば、雄しべなどは存在しない」とあるものたちが言うのは正しくない<sup>165</sup>。蓮華の上に羯磨杵がのっているからである。「蓮華と法源はないが、それ(羯磨杵)はある」と説かれているというならば<sup>166</sup>、その場合、それ(羯磨杵)は蓮華の花弁をそなえているので、[羯磨杵に蓮華は]含まれているというのが適当である。『ピンディークラマ』<sup>167</sup>にも

「[この偈によって]堅固であるがうつろいやすい我を空と静慮し、この儀軌を実行することで智恵の大地が加持される。虚空界の中心にある風のマンダラを観想せよ」

というところから

「4つのマンダラが収斂した金剛の大地の区画のマンダラで、そこに<ブルーム>字から完成された楼閣を観想せよ」

まで説かれている。この中の「智恵の土地」と「虚空界」は法源のことである。その「中心」が蓮華である。そこにある風、火、水、地の4つのマンダラを合わせたもので、しか

も羯磨杵の本質をそなえた「大地の区画」を生起させ、その上にある月輪に「ブルーム」字から楼閣も「生み出す」という意味である。それゆえ「ここには蓮華はなく羯磨杵がある」というのは大きな間違いである。

#### <12. 3. 4>

羯磨杵の臍 (nābhi) は門の長さ12個分 (=48マートル) である。その鉤の長さは門ふたつ分 (=8マートル) である。この場合、根本線の内側に門8つ分の長さ (=32マートル) で、外側は門ふたつ分の長さ (=8マートル) である。ここには中間部分 (antarāla) の帯は存在せず、トーラナはトーラナの柱のあいだが、水平方向に門の3倍 (=12マートル) である<sup>168</sup>。

その柱の上のトーラナは、門ひとつ分の長さ (=4マートル) の中に上に向かって11の層がある<sup>169</sup>。これらは順にバクリー、宝、ひづめ、金、マカラ、金、ひづめ、宝、ひづめ、金、外廊の各層で、幅は門の8分の1、8分の1、12分の1、24分の1、8分の1、24分の1、12分の1、8分の1、12分の1、24分の1、8分の1である<sup>170</sup>。

「バクリー、宝、場所 (sthāna)、金 (svaṇṇa)、マカラ、カーンチャナ (kāñcana, Tib. gser)、場所、宝、場所、金、外廊 (kramaśiṛṣaka)。場所の部分は12分の1になる。金 (suvaṇṇa) と呼ばれるものは門の24分の1、それ以外の層は門の8分の1である<sup>171</sup>」

と説かれている。

これらの水平の長さが説かれる。梵線から左右に4.5マートル離れ、第1の層は2.5マートルである。その上の第1の線は3.5マートル。第2、第3の線は5マートル離れ、3マートル。第4の線は4マートル離れ、3マートル。第5の線は3.5マートル離れ、3.5マートル。第6の線は3マートル離れ、5マートル。第7以下の3本の線は8マートル。第10の線は7マートル。第11の線は6マートルである。各層はそれぞれ外側の端に線を1本ずつ適宜、垂直に「引く」<sup>172</sup>。

内側の端にも適宜「引く」。第1の線の「梵線寄りの端から内側に向かって」0.5マートル離れたところに、上向きの線を「引く」。これはつぎの線と順につながっているので、1本の折れ曲がった線に見える。適宜、美しく描け。その内側には、宝などを描くために、0.5マートル離れて同様に折れ曲がった線を1本「引く」<sup>173</sup> (図9)。

あるものが

「この場合、横の長さは大部4つ分 (=16マートル) で宝の層である。同様に馬のひづめで区切ったところに、それ自身の印を飾る<sup>174</sup>。大部3.5 (=14マートル)<sup>175</sup>のバクリーと、同様に金、大部3つ分 (=12マートル) でマカラと外廊である<sup>176</sup>」  
といった場合、その説に関しては、中間部分の大きさにバクリーなどが含まれていないの

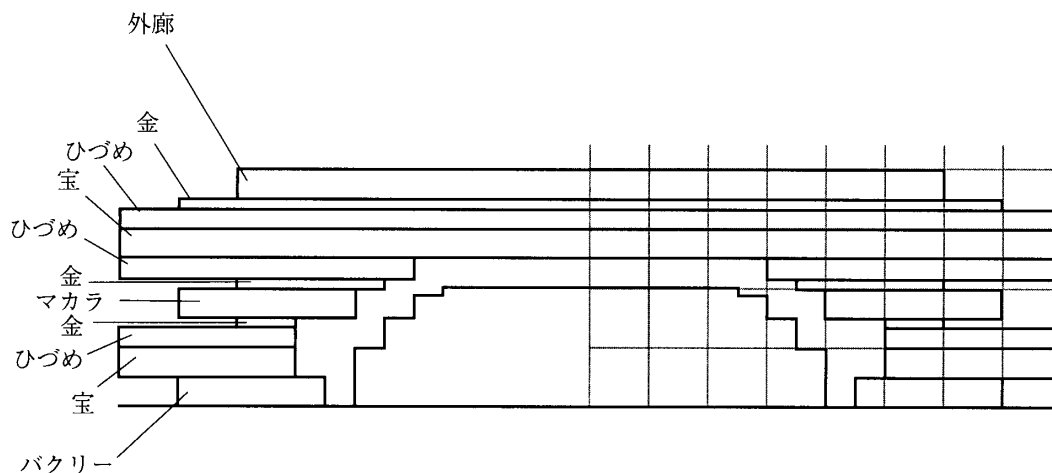


図9 トーラナ (第3のタイプ)  
(一目盛りは1マートラ)

で、「このバクリーは16マートラである」などと説かれていることが、どうして適当であるかを考察せよ<sup>177</sup>。

#### <12.3.5>

トーラナの上には、門ひとつ分 (= 4 マートラ) の梵線上に 2 マートラの法輪がある<sup>178</sup>。その座は外廊の層の上にある。その両側に、前と同様、雄鹿と雌鹿がいる<sup>179</sup>。その2頭の尻尾の外側の外廊には、三日月と宝と金剛の先端部<sup>180</sup>を付けた2.5マートラ分の宝の柄があり、その柄の先端には絹の縁飾りのある<sup>181</sup> 2 マートラの布 (paṭala) がついた白い傘蓋 (cchatra) がふたつある。[傘蓋は] 赤くて、2本のリボン (cīra) がかけてあるという説もある。

「その上に寂静 (= 0.5マートラ) の大きさの柄 (daṇḍa)<sup>182</sup>、同様に布 (paṭala)」と別のものが述べる<sup>183</sup>。傘蓋は6マートラであるという説もある<sup>184</sup>。すぐ近くの外廊の上に1マートラの幢幡 (dhvaja) と旗 (paṭāka) がある。法輪の外側に2マートラ分の羯磨杵の鉤があり、法輪の輻のあいだに見えかくれしている。

#### <12.3.6>

つぎに、外にふたつの輪 (āvalī) の層がそれぞれ1マートラ、あるいは2マートラずつである<sup>185</sup>。火炎輪は2マートラである (図10)。

『ヴァジュラダーカ・タントラ』(Vajradākatantra) にも同様に説かれる。

「ラジャスの区画の2倍の長さの火炎輪を外に [描く]。その鉄圍輪の外側に木などの8つの屍林 (śmaśāna) を [描く]<sup>186</sup>。」

屍林はさらに屍林に住む神々 (devatā) がいる場合に限る。他の場合は [屍林は] ない。

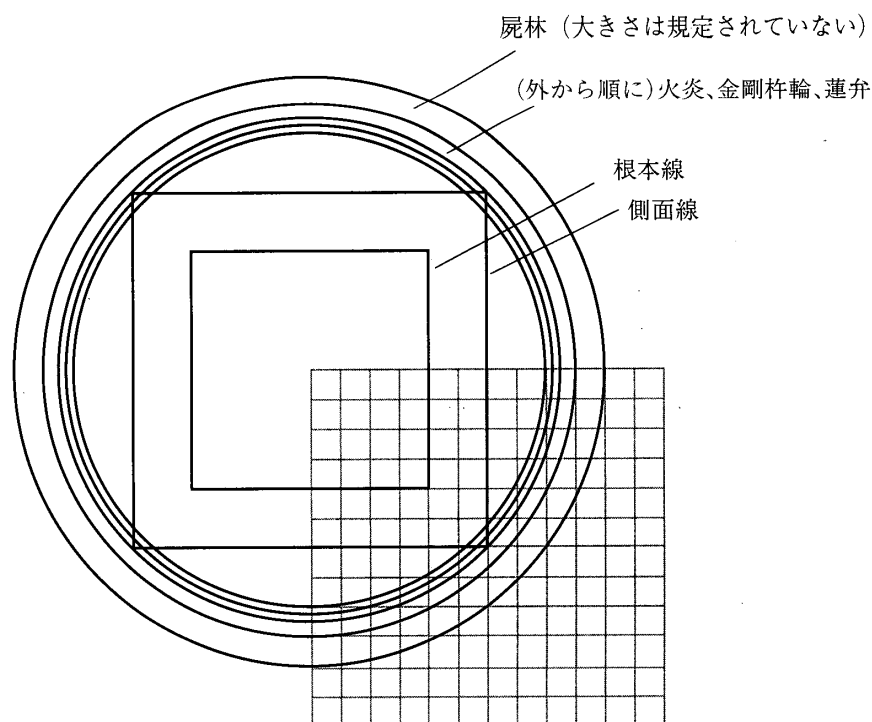


図10 マンダラの基本線（第二説）  
（一目盛りは4マートラ）

巡り合わせのよくない時代 (abhavyasamāgama) には、これら [屍林] も彩色マンダラには描かない<sup>187</sup>。他のところには、火炎の帯は4マートラであると説かれている<sup>188</sup>。サンヴァラ・マンダラに [描く] という説もある<sup>189</sup>。

「金剛、蓮華、車輪の形 (vajrapadmārirūpa) という三つの墻 (prākāra) を描け<sup>190</sup>」というので、金剛杵輪の外側に蓮華と車輪の輪を [描くよう] 述べた<sup>191</sup>。円の線のために糸を1ヴィタステイ程度長くせよ。あるいは一重の糸によって円の線を [引く]。

「マンダラの2倍の長さ」というお言葉によって、描かれるマンダラ (lekhyamaṇḍala) は、羯磨杵とその基礎となる [蓮華の] 花芯のはずれまでと、端を等しくし、根本マンダラの内側と外側で等しくなるようにするということが世尊によって示された<sup>192</sup>。以上が第二の説である。

### <12.3.7>

ナーガブッディ様は第一の説をお示しになっている<sup>193</sup>。彼は門扉とカポーラの長さが等しいことを説かれ、

「瓶の柱の上にあるトーラナが門の3倍になる<sup>194</sup>」

とおっしゃった。もしこのようであれば、トーラナの水平方向の長さは門の3倍ではなく、

4倍になる。そのため、高さだけが3倍であるというのが、そのお考えなのである<sup>195</sup>。

「ヴェーデーはあまねく門 (dvāra) の半分 (= 2 マートラ) で、カポーラとパクシャも同様に [門の半分] である<sup>196</sup>」

という教え (āgama) により、世尊がカポーラは門扉 (niryūha)<sup>197</sup> の半分であるとおっしゃっていて、トーラナの水平方向の長さが門の3倍になるという説も [可能である]<sup>198</sup>。

以上、二説をわれわれは説明した。

第二の説の場合、中心のマンドラ (garbhamaṇḍala) の2倍が外のマンドラ (bahirmaṇḍala) と説いたのは、蓮華の雄しべの線の内側のことである。一方、第一の説の場合、火炎輪までが、周囲の部分を含む中心のマンドラの2倍となるのである<sup>199</sup>。トーラナの柱より外側で、蓮華の雄しべの円の内側が14マートラであるというのは両方の説に一致しないので、認められない<sup>200</sup>。

## 12.4 マンドラの装飾

### <12.4.1>

ここで、門と門扉 (j) の接点から1マートラのところに、三日月にのった赤い宝、あるいは黄色、緑、黒の宝があり、その上に半分の金剛杵 (ardhavajra)、もしくは金剛杵全体 (sampūrṇavajra) がついている。これは

「ラジャス (a) の区画の外側の隅の、門と門扉の接点に、月と金剛杵の付いた宝が、あまねく光輝いている。」

と説かれているとおりでである<sup>201</sup>。別のところにも

「ヴェーデー (b) の外側と内側の隅に、月、太陽、宝の座に<sup>202</sup>、金剛杵の付いた宝石もひとつ、賢者たちは適宜描け。」

と説かれている<sup>203</sup>。

トーラナの柱 (h) はヴェーデーの四隅にある瓶 (kalāśa) に位置している。これもまた

「トーラナは門の3倍で、マカラの口から [もう一方の] マカラまで<sup>204</sup>である。トーラナの柱は上を向いて、ヴェーデーの壺 (kumbha) から現れる。」

と説かれているとおりでである<sup>205</sup>。これらの根本と上端には、宝石がついている。中央には、象の上に前足を伸ばした獅子がいる。

トーラナのアーサーラ (āsāra) から、あるいはこれが無い説の場合、バクリーの層 (o) に掛けられた宝のパトラチャター (patracchātā) があり<sup>206</sup>、これに赤、あるいは黄色、あるいはさまざまな色の布のアンチャラ (añcala)<sup>207</sup>が適宜きれいに掛けられ、宝の柄のついた払子がある。一説によれば、アンチャラの層 (g) にいる象の上に獅子がのり、その口

から宝の瓔珞が垂れ下がり、柱の中央には鏡があると説かれている<sup>208</sup>。宝の帯 (c) には三角、四角、点、円の順に<sup>209</sup>宝石がつながっている。ひとつひとつの柱<sup>210</sup>の横からである。

#### <12.4.2>

瓔珞 (hāra) の帯 (d) には4連の金の首飾りがあり、その横に、マカラの口からあふれ、赤い糸でつながれた真珠 (muktā) の瓔珞がある。両側と上下には、中央にルビー (māṇikyā) を金で付け、瓔珞の左右にわずかに短く掛けられた宝の環の縁飾りがあり、先端には厚みのある宝石が金で付けられ、美しく飾られた半瓔珞 (ardhahāra) がある。宝石の柄のついた払子、鈴が中にある払子<sup>211</sup>も掛けられているところがある。一説では、半瓔珞の両側には美しい花の半瓔珞が掛けられ、その横にはさまざまな布の半瓔珞があると説かれる。別のものは、隅には美しい花の半瓔珞と、布の瓔珞があるという<sup>212</sup>。瓔珞の内側には、一説によれば、蓮華の上に三日月と半分の金剛杵のついた日輪 (ravimaṇḍala) がある。一説では宝がある。一説では蓮華の上に金剛杵がある。

#### <12.4.3>

四方には蓮華の花弁の半分の形をした外廊 (f) に、金の壺 (suvarṇakumbha)、あるいは宝の壺 (ratnakumbha) に入った8本の幢幡と旗がある。[幢幡は] 三日月、宝、金剛杵を先端に付けた宝の柄に結わえられ、三つの舌<sup>213</sup>を先端に付けた鈴 (ghaṇṭā) があり<sup>214</sup>、動物の王(=ライオン)、ハンサ鳥の王、龍を食べるもの(=ガルダ鳥)、魚の王(=鯨?)、マカラのシンボル (cihna) が付き、風にはためくことで3カ所で折れ曲がり<sup>215</sup>、小さな鈴の音が響き<sup>216</sup>、払子も付いている<sup>217</sup>。旗も同様であるが、動物 [の王] などのシンボルなどは付いていない。

四隅には外廊の上に傘蓋 (cchatra) が4つある<sup>218</sup>。トーラナにはとても美しい天蓋 (vitāna) と瓔珞半瓔珞がある<sup>219</sup>。ひづめ (r, x) とヴァランダ (t) のはしには幢幡<sup>220</sup>と旗があり<sup>221</sup>、適宜、飾る。獅子、虎、ハンサ鳥、孔雀、キンナラ、雌のキンナラもいる。トーラナの横のそれほど遠くないところに、賢瓶 (bhadraghaṭa) から伸びた如意樹 (kalpapādapa) があり、象などの七宝 (saptaratna) もともにある<sup>222</sup>。あちらこちらの雲の中から姿を現し、花輪 (puṣpasraj) を手にする成就者 (siddha) たちがいる<sup>223</sup>。

以上は根本マンダラの外側に線を引く順序であり、すべてのマンダラに共通である<sup>224</sup>。

#### 訳註

<sup>1</sup> 出典不明。

<sup>2</sup> 2種の律義はVAの第20儀軌「弟子の招請の儀軌」(śiṣyādhivāsanavidhi) に説かれている。2種の律義とは「共通の律義」(sāmānyasaṃvara)と「阿闍梨の律義」(ācāryasaṃvara)を指す。同儀軌の末尾には、これらの2種の律義について「[弟子が] 阿闍梨にならない場合に与えるのが共通の律義で、帰依や発



菩提心のみを特徴とする。阿闍梨になる場合に与えるのが阿闍梨の律義で、5種の部族にまとめられる」と定義されている。なお桜井(1996)には同儀軌の翻訳とサンスクリット・テキストが含まれ、そこでは弟子の招請は「弟子受認」と訳されている。

<sup>3</sup> karmavajra は労働を行う者を指すのであろう。karmavajrin は実際の作業を指揮する弟子を指すのか。

<sup>4</sup> 出典不明。

<sup>5</sup> (処女の紡いだ糸か・・・一本ずつ染め)

Dārikapāda, *Śrīcakrasamvaramaṇḍalavidhi tattvāvatāra*, TTP, Vol. 51, No. 2146, 166.4.1. [NRC 111.5]

ma nyams ral (NRC ras) bal gtsang ma las //

SSGT, TTP, No. 428, Vol. 9, 45.4.7-8. [NRC 111.5-112.1]

dkyil 'khor thig gdab thig skud ni // kha bsgyur gtsang ma sra zhing phra //

de bzhin bu mo gzhon nus bkal // sar pa shin du gtsang ma dang //

mdzes shing shin tu ran pa (P. rin pa) dang // dri zhim reg na bde ba dang //

legs par bkal dang sra ba dang // sbom pra la sogs bkal legs dang //

'jur mdud med par gyur pa yi // thig skud me tog spos mchod pas //

shes rab can gyis thig gdab po // (伊藤 2000: 26-27)

其界道繩令童女搓。圓牢淨潔及以堅密。其繩五色。而用白氈及麻等作。取有乳木而作椶子。頭如金剛。眞言持誦。向上小出頭。打下入地。於曼荼羅隨方應釘。(大正藏第897番、第18卷、p. 764b)

Jayabhadra, *Śrīcakrasamvaramaṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2192, Vol. 51, 280.5.5-6. [NRC 112.1]

gzhon nu mas byas skud pa'am // de bzhin dpa' po rin gyis nyos //

Jayasena, *Śrīḍākārnāvatāntrābhiṣekavidhi*, TTP, No. 2235, Vol. 52, 134.5.2. [NRC 112.1]

gzhon nu mas byas skud pa'am // de bzhin dpa' po'i rin gyis nyos //

Divākaraçandrapāda, *Śrīherukabhūta nāma maṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2390, Vol. 56, 227.1.6-7. [NRC 112.1]

dur khrod nas rnyed pa 'am dam tshig dang ldan pas bkal ba'i sar pa la dkar po dang ser po dang dmar po

dang ljang khu dang nag po dang dri dang kha dog bzang po grub pa'i phye mas bsras pas so sor btsos pa la /

Dārikapāda, TTP, No. 2146, Vol. 51, 166.4.4-5. [NRC 112.1]

khrag chen gyis ni spangs pa yi // sum sgril skud pa tshad ldan pa //

bdud rtsi tsan dan dkar po yis // legs par byugs te thig gdab bya //

(白、黄色、赤、緑、黒の染料で・・・1本ずつ染め)

Buddhaguhyā, *Vairocanābhisambodhitāntrapaṇḍārtha*, TTP, No. 3486, Vol. 77, 94.3.1-7. [NRC 111.2]

de la dkyil 'khor gyi thig gdab pa ni tshon sna lnga pa'i srad bu rnam pa gnyis su bstan te / 'di lta ste / bar

snang la rang bzhin gyi dkyil 'khor gyi thig gdab pa dang / sa la de'i gzugs brnyan du gyur pa byin gyis

brlab pa'i dkyil 'khor gyi thig gdab pa ste /

srad bu rnam pa bzhir bshad de // dkar po ser po dmar po dang //

nag po zhes ni brjod par bya'o // snga ma nam mkha' lta bur bshad //

bar snang la ni bzung bas su // der ni dkyil 'khor brtag par bya //

srad bu dag ni gnyis pa yis // sa la dkyil 'khor dgod par bya //

zhes gang gsungs pa yin no // ... gsher thig ni mtshan nyid ma bstan kyang / kha dog 'chol pa yongs su

spang ba'i phyir / dkar po kho nar bya'o //

VDT, TTP, No. 18, Vol. 2, 134.3.7. [NRC 111.3]

dkar dang ser dang dmar dang ljang // kun gyi nang rol nag po ru //

tshon gyi cha ni rim bzhin dgye //

Dīpaṅkarabhadra, *Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2728, Vol. 65, 39.4.8-5.1. [NRC 111.3]

'jam pa'i rdo rje bdag gzugs kyis // 'bar ba'i lta ba'i lcags kyus dgug //

rang gi mdog ni nang du gzhug // rnam snang la sogs thugs yes shes //

Saraha, *Śrībuddhakapāla nāma maṇḍalavidhikrama-pradyotana*, TTP, No. 2529, Vol. 58, 107.1.4. [NRC 111.4]

rnal 'byor dbang phyug dam pa yi // shes rab can gyis thig gdab ste //

srad bu kha dog sna lnga ru // rnam par phye ste btsos nas ni //

thod pa'i snod bzhag dag mos pas // sa bon las byung rigs lngar bskyed //

Kṛṣṇa, *Bhagavacchrīcakrasaṃvaramaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2164, Vol. 51, 211.4.1. [NRC 111.4]

rnal 'byor dbang phyug chen po'i grong // shes rab can gyis thig gdab po //

ji srid srad bu lnga po ni // rnam par phye ste btsos nas su //

dpal ldan khrag 'thung la sogs kun // spyang drangs nas ni de ru gzhag //

<sup>6</sup> この5文字から生起させる方法はディヴァーカラチャンドラのマンダラ儀軌（TTP, No. 2390, Vol. 56, 227.1.7 ff）に現れる。下記の引用文参照。

<sup>7</sup> チベット訳は「五如来の自性をそなえるものとなったと観想し」。

<sup>8</sup> （光でできた智慧の糸）

Saraha, *Śrībuddhakapāla nāma maṇḍalavidhikrama-pradyotana*, TTP, No. 2529, Vol. 58, 107.3.1. [NRC 110.4]

dang bo (NRC por) dkar rtsi thig sogs las (NRC pas) // rim bzhin thig gdab nges par bya //

de steng ye shes thig btap pas // kun nas yongs su brkyang bar bya //

Durjayacandra, *Suparigraha nāma maṇḍalopāyikāvidhi*, TTP, No. 2369, Vol. 56, 146.2.6-7. [NRC 110.3]

thig skud gdab pa'i rim pa bzhin // ye shes thig skud rab tu brkyang // ...

ji ltar (NRC skad) gsungs pa'i thig gdab pas // dkyil 'khor sbrul pa'i thig la yang //

ye shes thig skud rab tu gdab //

Bhavabhadra, *Śrīvajradāka nāma mahātantrarājasya vṛtti*, TTP, No. 2131, Vol. 50, 88.3.1. [NRC 110.4]

las thams cad pa'i skud pa'i ri mo'i mtshan ma sngar byas pa la / ye shes kyi skud pa bri bar bya'o //

Amoghapāda, *Maṇḍalavidhi*, TTP, No. 2846, Vol. 67, 120.1.5-6. [NRC 110.4-5]

de nas kha dog gcig pa'i skud pa las thams cad par byin gyis brlabs pas sa'i thig btap la / thig de'i steng du

ye shes lnga'i thig btap la / snga ma'i thig byin gyis brlab par bya'o //

Ratnavajra, *Śrīsarvabuddhasamāyogaḍākinījālasaṃvaramahātantrarāja nāma maṇḍalopāyikāsarva-sattva-sukhodayā nāma*, TTP, No. 2551, Vol. 59, 32.5.5-6. [NRC 110.5]

las kyi thig gis rim (P. rims) bzhin du // ye shes thig ni brkyang bar byas //

VDT, TTP, No. 18, Vol. 2, 134.4.7. [NRC 110.5]

ye shes thig skud gshegs gsol nas // de nas las 'di brtsam (NRC brtsams) par bya //

'dod dang thar pa rab ster ba'i // tshon rtsi dag ni bskyod (NRC bskyed) par bya //

SUT, Chap.17, v.21 (Tsuda 1974 : 121) [NRC 110.5, 111.3]

trir jahkāram uccārya nābhau dhārya vāmamuṣṭinā /

khasūtram pātayed dhīmān tathaivādhaḥ prasūtrayet //

Nāgabuddhi, *Śrīguhyasamājamaṇḍalopāyikā-viṃśatividhi*, TTP, No. 2675, Vol. 62, 14.4.5. [NRC 110.5-111.1]

slob beas rdo rje'i 'gros kysis 'gros dal ba // byas pas mkhar gnas thig ni ji lta ba //

de bzhin sa la gnas pa gdab par bya //

Kṛṣṇa, *Bhagavacchrīcakrasaṃvaramaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2164, Vol. 51, 211.4.6-7. [NRC 111.1]

lho ru mngo par phyogs gyur nas (NRC phyogs nas kyang) //

nam mkhar de bzhin thig gnyis gdab (NRC thig gdab po) //...

sa la tshags pa'i thig gnyis gdab //

Tathāgatavajra, *Śrīsaṃvaramaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2226, Vol. 52, 78.2.3-4. [NRC 111.1]

de'i dus su nam mkha'i (P. kha'i) thig bzhin du sa la tshangs pa'i thig gnyis lag pa gnyis mnyam du babs pas

(NRC bab nas) gdab par bya'o //

MVAS, TTP, No. 126, Vol. 5, 245.4.7-8. [NRC 111.1]

shar du srad bu bri ba ni // lte ba'i thad kar bzung nas su //

bar snang la ni gzung (NRC bzung) bar bya // de nas lho phyogs song nas su //

byang phyogs ni bre bar bya // de nas srad bu gnyis pa ni //  
rang gis blangs nas de nyid du //

<sup>9</sup> 「シャーシュヴァタ」(śāśvata)は大日の異名。

<sup>10</sup> om̐ āḥ śāśvata vajrasūtram me prayaccha mahāmaṇḍalasūtraṇāya hūṃ.

<sup>11</sup> STTS (堀内 1983:233)とSVU (密教聖典研究会 1987:32)に同じマントラが含まれる。

<sup>12</sup> この方法はSTTSの「金剛秘密観視印智」(堀内 1983:233)の内容を、おそらくふまえている。テキストは以下の通り。

pradrutapracalaccakṣuḥpakṣmākarṣaṇālocanā /  
dīptadrṣṭir iti proktā sarvam ākarṣayej jagat //

(目をすばやく瞬かせ、まつげを引き上げた目が「輝く視線」と呼ばれる。すべての生類を鉤召せよ。)

<sup>13</sup> <12. 1. 2>のここまでの内容は、ディヴァーカラチャンドラのマンダラ儀軌の以下の一節と平行。

Divākaracandrapāda, Śrīhrerukabhūta nāma maṇḍalopāyikā, TTP, No. 2390, Vol. 56, 227.1.6-2.4.

de nas rnal 'byor pas kye rdo rje'i ting nge 'dzin gsum bya ste / lhag par gnas gzhug pa'i tshe dang / lha'i dkyil 'khor gshegs su gsol ba'i don du nam mkha' la dgod par byas la / dur khrod nas rnyed pa'am dam tshig dang ldan pas bkal ba'i sar pa la dkar po dang ser po dang mar po dang / ljang khu dang nag po dang dri dang kha dog bzang po grub pa'i phye mas bsres pas so sor btsos pa la / bhrūṃ aṃ jriṃ khaṃ hūṃ yi ge las grub pa rnam par snang mdzad dang / rin chen 'byung ldan dang / 'od dpag med pa dang / don yod grub pa dang / mi bskyod pa'i rang bzhin dang / me long lta bu dang / mnyam pa nyid dang / so sor rtog pa dang / bya ba nan tan dang chos kyi dbyings shin tu rnam par dag pa'i ye shes kyi bdag nyid la me long la sogs pa yang so sor ye shes bzhi'i rjes su 'brel pas nyi shu rtsa lngas phye ba'i thig skud rim bzhin du lag par bzhag la bsgriḥ bar bya ste / de nas rang ki phyogs na rnam par gnas pa'i de bzhin gshegs pa thams cad 'dus par gyur pa / rnam par snang mdzad la sogs pa de bzhin gshegs pa lnga bltas la / de mams kyi thugs kar yang yi ge vum̐ la sogs pa'i sa bon las grub pa'i ye shes kyi thig skud 'od zer gyi rang bzhin bltas la / om̐ āḥ śāśvata vajra / sūtram prayaccha mahāmaṇḍalasūtraṇāya hūṃ zhes bya ba 'dis rnam par snang mdzad la gsol ba gdab par bya'o // de bzhin du mtshan spos la rin chen 'byung ldan la sogs pa la gsol ba gdab par bya'o // de nas kye rdo rje'i rnal 'byor gyis de ltar gnas par byas nas / slob dpon gyis mig gnyis la ja yig las nyi zla bsgom par bya ste / rab tu 'bar zhing bsgyod pa'i dmigs la mig gi rdzim 'bar ba'i lta stangs kyis lcags skyus bkug cing spyān drangs pa'i ye shes kyi thig bcom ldan 'das kyis bskul zhing btang bar mos te / thig skud lag tu bzhag la rang rang gi kha dog gi nang du rnam par bcug ste /

<sup>14</sup> この文章の典拠は不明。

<sup>15</sup> 大日である場合は、東の尊格に相当し、アムリタクンダリンの場合は、北門の「すべての行為の尊」に相当する。これは著者のアバヤーカラグプタがジュニャーナパーダ流の秘密集会マンダラを念頭においているためである。他のマンダラの場合もこれに準ずるのであろう。

<sup>16</sup> om̐ āḥ anyonyānugatāḥ sarvadharmāḥ parasparānupraviṣṭāḥ sarvadharmā atyantānupraviṣṭāḥ sarvadharmā om̐ āḥ hūṃ. このマントラはSVU (密教聖典研究会 1987:37)とディヴァーカラチャンドラのマンダラ儀軌 (TTP, No. 2390, Vol. 56, 227.2.7-8)に含まれる。

SUT (Tsuda 1974: XVII,19 cd) [NRC 130.1]

valayet sūtram anyonyam̐ sarvadharmasvabhāvataḥ //

<sup>17</sup> <12. 1. 6>で説明されるように、この場合のマンダラは「周囲の部分を含む根本マンダラ」を指す。その2倍と規定される糸の長さは、この後でひかれる梵線の長さに一致する。。

<sup>18</sup> 『俱舍論』「分別世間品第三」の次の一節を指す。

蟻虱麥指節後後増七倍 (大正藏第1558番、第29卷、p.62a)

サンスクリット・テキストは以下の通り。

yavas tathāṅgulīparva jñeyam̐ saptaṅgūṭtaram (Ch. 3, v.86cd)

1 アングラは8ヤヴァという換算法は、たとえば『ブリハット・サンヒター』(Br̥hatsaṃhitā) 第57章第2節にあげられている(矢野・杉田 1995: 273)。7ヤヴァよりも8ヤヴァの方が一般的であったようである。1アングラを7等分するため、8等分する一般のヤヴァよりも、この場合、若干長くなるので、「20分の1長い」という説明を補ったのであろうか。ただし、「20分の1」では両者は近似値にはならない。なお、1アングラを8ヤヴァと換算する方法は、クラダッタ(Kuladatta)の『クリヤー・サングラハ』(Kriyāsaṃgraha)にも見られる(森 2003: 240)。

- <sup>19</sup> 1バーガは「門の大きさ」すなわち4マートラであるため、その8倍、すなわち32マートラは後述の根本線の一辺の長さになる。したがって、文頭の「輪」は根本線に囲まれた区域を指す。この部分は「中心のマングラ」(garbhamaṇḍala)とも呼ばれる。「周囲の部分を含む根本マングラ」は、その外側に8マートラずつを加えた一辺48マートラの正方形である。20分の1の箇所が具体的にどこを指しているのかはあいまいであるが、1バーガの20分の1、すなわち0.2マートラが糸の太さであると理解しておく。1ハスタは約45~50cmに相当するので、48cmとした場合、1アングラは2cm、1ヤヴァは3mm弱となる。1ハスタ(=24アングラ)のマングラ(周囲の部分を含む根本マングラ)の場合、その48分の1である1マートラは0.5アングラ、1バーガは2アングラとなり、糸の太さはその20分の1、すなわち0.1アングラとなる。これは上記の「1ヤヴァが糸の太さ」という規定よりもいくらか細い。なお「門」に相当する語はチベット訳に含まれない。NRCによれば、この規定はSUTの次の文章をふまえている(この箇所は津田氏の翻訳には含まれていない)。

SUT, Ch. 17, v. 20cd (Tsuda 1974: 121) [NRC 113.4]

cakraṃ dviguṇato dīrghaṃ dvāraṃ dvāvimsatibhāgikam //

- <sup>20</sup> 直径96マートラのマングラ全体が6ハスタの場合、糸の長さは6ハスタよりもいくらか短くてもよいという規定であろう。その理由は不明であるが、<12. 1. 6>で紹介される92マートラの梵線と関連するのかもしれない。

- <sup>21</sup> SVUに該当する文章がある(密教聖典研究会 1987: 38)。サンスクリット・テキストは以下の通り。

maṇḍalapramāṇena ca dviguṇaṃ ṣaḍḍhaste pārimāṇḍalyena kanīyasāpramāṇaṃ (校注によれば Ms. は kanīyasāではなく kanīyasī) sūtraṃ kāryam anyatrānurūpam.

これに対し、VAが示す文章は以下の通り。

pārimāṇḍalyena ṣaḍḍhastamaṇḍale kanīyasāpramāṇaṃ sūtraṃ kāryam anyatrānurūpatah.

- <sup>22</sup> 牛の五種の生産物。牛糞、牛尿、牛乳、バター、カード。

- <sup>23</sup> 心口意の三密を表す「オーム、アーハ、フーム」(oṃ aḥ hūṃ)の三種子であろう。

- <sup>24</sup> (結び終わったならば・・・マントラを唱えて守護し)

Bhavabhadra, Śrīvajraḍāka nāma mahātantrarājasya vṛtti, TTP, No. 2131, Vol. 50, 88.3.1. [NRC 112.1]

las thams cad pa'i skud pa'i ri mo'i mtshan ma sngar byas pa la /

Amoghapāda, Āryamañjuśrīguhyatantrasya maṇḍalavidhi, TTP, No. 3492, Vol. 78, 17.1.4-5.

thig skud sum sgril mdzes pa yis // mkhas pas thig btab phun sum tshogs //

shar gyi sgor ni gnas nus su // khro bo'i skur ni rang byas nas //

sngags kyis yi ge dgod par bya // g'yon gyi khu tshur lte bar bstan //

las kyi khro bor bsams nas su // thog mar shar nas nub tu'o //

Dīpaṅkarabhadra, Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhi, TTP, No. 2728, Vol. 65, 39.5.3. [NRC 130.2]

yig gsum chud par māl 'byor pas //

Ratnākaraśānti, Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhiṭīkā, TTP, No. 2734, Vol. 65, 161.1.2-3. [NRC 130.2]

de nas zhes bya ba ni sgril ba'i rjes thogs la spos chab bdud rtsi lnga dang bcas pa la spangs la yi ge gsum gyi nang du chud par byas nas dris byugs nas (P. omits nas) gser gyi snod kyi nang du bzhag la /

Saroruhavajra, Hevajramaṇḍalakarmakramavidhi, TTP, No. 2419, Vol. 56, 5.4.5. [NRC 130.2]

oṃ āḥ hūṃ gsum mtha' gnyis dang dbus su bkod la /

- <sup>25</sup> VAの第7儀軌「土地の掌握の儀軌」(bhūmiparigrahaṇavidhi)を指す。そこでも左右の目を「マ」と「タ」

の文字から太陽と月に変え、全世界を観察する「金剛の観察」(vajradṛṣṭi) が説かれている。

- <sup>26</sup> 同じマントラが STTS (堀内 1983 : 233) と SVU (密教聖典研究会 1987 : 34) に含まれる。  
<sup>27</sup> 同じマントラが STTS (堀内 1983 : 386) と SVU (密教聖典研究会 1987 : 34, 36) に含まれる。  
<sup>28</sup> 前と同様、「オーム、アーハ、フーム」を指す。  
<sup>29</sup> この段落<12. 1. 3>で説かれる儀礼の流れは SVU (密教聖典研究会 1987 : 34) にほぼ平行。またディヴァーカラチャンドラのマンダラ儀軌 (TTP, No. 2390, Vol. 56, 227.2.6-3.3) とほぼ平行。後者のテキストは以下の通り。

Divākaraṇḍrapāda, Śrīhrerukabhūta nāma maṇḍalopāyikā, TTP, No. 2390, Vol. 56, 227.2.7-3.3.

gha sma ri'i rnal 'byor dang ldan pa'i slob ma dang stabs gcig tu thig 'dzin pas phan tshun gnas te / chos thams cad ni phan tshun gnas pa chos thams cad ni gcig nas gcig tu gnas pa / chos thams cad ni shin tu rab tu gnas pa ste / hūm zhes bya ba 'di (P. 'das) brjod cing thig skud (P. bskul) bsgril bar bya'o // de nas yang ji ltar bsgril shing gcig tu gyur pa'i thig skud khru ru ni dkyil 'khor gyi nyis 'gyur du 'gyur la / phra sbom ni sgo'i nyis shu cha'o // de nas bsngags pas dri'i chus bsres pa'i bdud rtsi rnam pa lngas gsher bar byas la / de'i snying bor yi ge gsum chud par byas (P. omits byas) te dris nye bar byugs pa'i gser la sogs pa'i snod du bzhag cing mchod pa rnam pa lngas mchod la lag tu bzhag ste yi ge hūm gis bzlas pas yongs su bsrung bar bya'o //

- <sup>30</sup> マンダラの土地への水の散布は、VA の第10儀軌「瓶の招請に関する儀軌」(kalasādhivāsanavidhi) でも説かれている。  
<sup>31</sup> 密教儀礼における閻伽水については拙稿 (1991a) を、また観想法における閻伽水やプージャーの位置づけについては拙稿 (2000a) 参照。  
<sup>32</sup> <12. 1. 3>の冒頭にも登場した墨打ちの補助を行う弟子を指す。以下のような他のマンダラ儀軌では尊格が異なることを NRC は指摘する。

Nābuddhi, Śrīguhyasamājamaṇḍalopāyikā-viṃśatavidhi, TTP, No. 2675, Vol. 62, 14.3.8. [NRC 112.2]

sngags pa mi bskyod sbyor ldan pas // rtag pa'i rnal 'byor pa la sbyin //

Ratnākaraśānti, Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhiṭīkā, TTP, No. 2734, Vol. 65, 161.1.5-6. [NRC 112.2]

sgrub pa'i grogs po yang bdud rtsi thab sbyor gyi gzugs su bsams la.

Kambala, Śrīcakrasaṃvārābhisamayāṭīkā, TTP, No. 2161, Vol. 51, 193.5.2. [NRC 112.2]

de nas slob ma rang gi 'dod pa'i lha'i rnal 'byor dang ldan pa thig skud 'dzin pa.

Jayabhadra, Śrīcakrasaṃvāramaṇḍalopāyikā, TTP, No. 2192, Vol. 51, 281.1.8. [NRC 112.2]

he ru ka dpal bdag gyur nas // dum skyes ma yi rang bzhin gyis //

Divākaraṇḍrapāda, Śrīhrerukabhūta nāma maṇḍalopāyikā, TTP, No. 2390, Vol. 56, 227.3.5. [NRC 112.2]

byang phyogs su sgrub pa po gha sma ri'i gzugs su dmigs la.

- <sup>33</sup> 左が月、右が太陽に対応する。  
<sup>34</sup> 金剛歩の方法は VA の第7儀軌「土地の掌握の儀軌」(bhūmiparigrahaṇavidhi) の中で説かれる。  
<sup>35</sup> 「ジャ」ではなく「ジャハ」が適当であるが、サンスクリット写本はいずれも「ジャ」と読む。チベット訳には「さらに<ジャ>の文字によって」は含まれない。文脈からは不要であり、この部分サンスクリットに混乱があるのかもしれない。ACR の平行な箇所にも含まれない。  
<sup>36</sup> 「三つのジャハの文字」に該当する部分は、サンスクリット写本に混乱がある。直前の阿闍梨のところと同じ表現を著者が用いたと考え、tribhir jjaḥkārāis という読みを採用する。  
<sup>37</sup> この部分は意味が明らかではない、マンダラの区画の中央を指して「臍」と呼んでいるのか？  
<sup>38</sup> この時点では空中で音を出すだけで、実際に地面の上には墨打ちをしていない。<12. 1. 5>のはじめの文章を参照。「墨打ちしながら」は、文字どおりには「落としながら」(pāṭayan)。  
<sup>39</sup> om vajrasamaya sūtram mātīkrama hūm hūm om svā āḥ hā.  
<sup>40</sup> 出典不明。チベット訳はこの部分を偈頌にするが、サンスクリットは散文である。  
<sup>41</sup> (すべての方角が同じ長さになるように確認せよ)

VDT, TTP, No. 18 Vol.2, 134.4.1. [NRC 112.2]

phyogs kun mnyam par dmigs nas su //

<sup>42</sup> 直径が1ハスタであろう。

<sup>43</sup> ヴィタステイは長さの単位。1 ヴィタステイが手首から中指の先までの長さで、1ハスタの半分である。

<sup>44</sup> 火炎輪はマンダラの一番外側の区画。<12. 1. 6 ><12. 2. 6 >参照。

<sup>45</sup> (火炎輪の端まで・・・墨打ちせよ)

Sarahapāda, *Śrībuddhakapāla nāma maṅḍalavidhikrama-pradyotana*, TTP, No. 2529, Vol. 58, 107.1.7-8. [NRC 112.3]

dang po byang dang lho yi ni // ... nub dang shar nas gnyis pa dang //

Kṛṣṇa, *Bhagavacchrīcakrasaṃvaramaṅḍalavidhi*, TTP, No. 2164, Vol. 51, 211.4.5. [NRC 112.3]

dang por byang dang lho yin ni //

Tathāgatavajra, *Śrīsaṃvaramaṅḍalavidhi*, TTP, No. 2226, Vol. 52, 78.2.4. [NRC 112.3, 112.4]

dang por gshin rjer kha ltas te // 'khor lo'i sa yi byang du gnas //

mkha' dang sa la thig gtab bya // blo ldan dang bcas g'yon skor du //

shar gnas nub tu blta ba yis // slar yang tshangs pa'i thig gnyis pa //

mer gnas nub tu la bltas pas // lho yi char ni thig gdab bya //

Dārikapāda, *Śrīcakrasaṃvaramaṅḍalavidhi-tattvāvatāra*, TTP, No. 2146, Vol. 51, 166.4.7-8. [NRC 112.3]

byang dang lho yi sgor gnas te // tshangs thig gnyis pa gdab par bya //

Ariṣṭidhīmat, *Śrīcakrasaṃvarodaya nāma maṅḍalopāyikā*, TTP, No. 2249, Vol. 52, 175.5.7-176.1.1. [NRC 112.4]

lho yi sgo ru song nas ni // lhag ma rnams su yongs su bskor //

lha mo'i rgyud gsungs rim pa'o // rnal 'byor rgyud rig shar sogs nas //

lho yi sgo ru 'gro ba ni // gang bstan bde (NRC bden) bar gsungs pa yis //

dkyil 'khor bri bar brtag (NRC bstan) pa ni // kun rdzob don du rtogs par bya //

phyogs ni mtha' yas tsha shes kyi // lho la sogs pa brtags na med //

lho yi zhal ni gar yin nyid // rnal 'byor bas ni kun rdzob nyid //

<sup>46</sup> (悪しき徴候のものには・・・弟子も狂う)

この偈のサンスクリット・テキストが伊藤 (2000: 42) に示されているが、最後の vibhrama は vibhramah とすべきであろう。

SSGT, TTP, No. 429, Vol. 9, 45.5.1. [NRC 113.3]

ltas ngan byung na dngos mi 'grub // srad bu chad na bla ma 'chi //

ring thung khyer na nad kyis 'debs // phyogs 'khrul slob ma myos par 'gyur// (伊藤 2000: 26-27)

次第應知。放繩之時若惡相現。即不成就。其繩若斷尊者必死。其繩麤細不圓即有病患。忽若迷方而作法時。弟子皆狂。(大正藏第897番、第18卷、p. 764b)

VDT, TTP, No. 18, Vol. 2, 134.4.6. [NRC 113.3]

thig skud chad na slob dpon 'chi // dman dang lhag pas nad 'byung ste //

phyogs la 'khrul na slob ma byos //

Ratnākaraśānti, *Śrīguhyasamājamaṅḍalavidhiṭkā*, TTP, No. 2734, Vol. 65, 161.3.7-8. [NRC 113.3]

ltas ngan byung na zhes bya ba ni tshagns pa'i thig gdab pa dang 'brel bas so // na bar 'gyur zhes bya ba ni bla ma nyid do //

Dārikapāda, *Śrīcakrasaṃvaramaṅḍalavidhi-tattvāvatāra*, TTP, No. 2146, Vol. 51, 166.4.6. [NRC 113.4]

ltas ngan byung na dngos mi 'grub // chad pas slob dpon 'chi 'gyur zhing //

ring ba thung khyer na nad kyis 'debs // phyogs 'khrugs slob ma nyon mong 'gyur (NRC reads byung for 'gyur) //

Divākaracandrapāda, Śrīhrerukabhūta nāma maṇḍalopāyikā, TTP, No. 2390, Vol. 56, 228.1.7-8. [NRC 113.4]

mtshan ngan dngos grub min pa ste // thig skud chad na bla ma nyams //

dman dang stongs pas nad la sogs // phyogs la rmongs na slob ma 'jul //

Cf. *Bṛhatsaṃhitā*, ch. 53, v.110 (Bhat 1981 : 491)

sūtracchede mṛtyuḥ kīle cāvānmukhe mahān rogaḥ /

grhanāthasthapatīnām smṛtilope mṛtyur ādeśyaḥ //

(糸が切れると家長と棟梁の死が、杭が逆に打ち込まれると大病が、記憶違いをすると死があると教えるべきである) (矢野・杉田 1995 : 242)

<sup>47</sup> (また同様に弟子がいないときは、杭に結んで墨打ちせよ)

VDT, TTP, Vol. 2, 134.4.3.

slob ma med na rang nyid kyis // phur bur brtags te bri bar bya //

<sup>48</sup> 「門の17の長さ」は68マートラに相当する。これは外周の半径である48マートラの $\sqrt{2}$ 倍にはほぼ相当する。

<sup>49</sup> 方位の確定のために引いた中央の円と四方の4つの円を指す。VAでは方位の確定のために四つの円に言及するだけであるが、中央の円を含むことをNRCは説明する(112.2.4-5)。

<sup>50</sup> 糸の長さの規定として、すでに<12. 1. 3>に類似の表現があらわれている。以下にみるように「マンダラ」は一辺48マートラの楼閣部分(すなわち周囲を含む根本マンダラ)を指し、その一辺の2倍が梵線の長さとなる。

<sup>51</sup> マンダラの楼閣の下には巨大な羯磨杵がある。ヴェーディカーとはこの場合、羯磨杵の中心部分を指す。チベット訳テキストでは「臍」(lte ba)と訳されている。この部分から羯磨杵は四方に鉗を伸ばし、それが楼閣のトーラナの周囲に描かれる。ヴェーディカーの大きさは一辺48マートラの正方形に相当するため、その端の線は「周囲を含む根本マンダラ」の各辺に一致する。楼閣の周囲に描かれる羯磨杵は<12. 2. 6>で説明される。著者は<12. 2. 6>では同じ部分を「臍」(nābhi)と、またVAの第50儀軌「金剛杵と金剛鈴の特徴などに関する儀軌」で五鉗杵の形態を説明するときに、中央部分を「ヴァラタカ」(varaṭaka)と呼ぶ。

<sup>52</sup> マートラは梵線の96分の1、「門の大きさ」の4分の1に相当し、マンダラの墨打ちのもっとも基本的な単位である。著者はこれらの長さを次の<12. 2. 7>で説明する。さらに、門の大きさを「大部」(mahābhāga)、その4分の1を「小部」(kṛṣa)、さらにその2分の1を「寂静」(śiva)と呼ぶ説を<12. 3. 1>であげる。この場合の小部がマートラに相当する。

<sup>53</sup> 根本線は一辺32マートラの正方形で「根本マンダラ」と呼ばれ、その外側に8マートラずつ伸ばすと一辺48マートラの正方形ができる。その線は「側面線」(pārśvasūtra)と呼ばれる。側面線の内部は「周囲を含む根本マンダラ」(saparikaramūlamanḍala)と呼ばれる。梵線の長さはこの48マートラの2倍の96マートラであるため、このような規定がある。

<sup>54</sup> この場合の「マートラ」は「大きさ」の意味。

<sup>55</sup> ここで挙げられているトーラナ以下の6つは、根本線すなわちマンダラの楼閣の外側に描かれる要素で、梵線上では全体で24マートラを占める。このうち、トーラナは楼閣の四方の門の外側に、法輪はトーラナの上に、羯磨杵は楼閣の下に実際は位置し、蓮弁以下の3つはマンダラの外周の3重の区画に相当する。トーラナは<12. 2. 5>、法輪と羯磨杵の鉗は<12. 2. 6>、蓮弁以下は<12. 2. 7>で、それぞれ詳しく説明される。

<sup>56</sup> 出典不明。

<sup>57</sup> 出典不明。

<sup>58</sup> 前段落の規定では、鉗は2マートラ、火炎輪は4マートラであるが、それが1マートラと3マートラ、あるいは両者が2マートラの場合、梵線は96マートラよりも4マートラ短くなる。「火炎の端のマンダラから4マートラ分の線が余分になる」というのは、梵線の両端がそれぞれ2マートラずつマンダラの外周からはみ出すので、その和である4マートラを指すのであろう。著者が否定する説の典拠は不

明。

<sup>59</sup> 出典不明。

<sup>60</sup> *Dīpaṅkarabhadra, Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2728, Vol. 65, 40.1.6-7. [NRC 110.3-4]

sems can bsam pa la brten nas // tshad la sogs pa nges mdzad kyi //  
thabs shes las byung dngos grub la // tshad sogs nges pas ci zhig bya //  
de ni khru gcig nas brtsams te // ji srid khru stong bar du'o //  
de ltar 'khor lo'i de thig gdab //

*Nāgabuddhi, Śrīguhyasamājamaṇḍalopāyikā-viṃśatividhi*, TTP, No. 2675, Vol. 62, 13.3.3. [NRC 110.4]

sngags pas slob ma'i nus pa dang // rjes su bstan nas dkyil 'khor de //  
khru gang pa nas brtsams byas nas // khru stong thar du bri bar bya //

<sup>61</sup> 根本マンダラの一辺が千ハスタのマンダラを例に取り、1 マートルの長さを算出し、この4 つ分である125ハスタが、前の説にしたがった場合、余分の長さとなる。

<sup>62</sup> 前の段落の規定では、いずれも2 マートルずつを占める。

<sup>63</sup> トーラナの高さが門の3 倍の12マートルであることは<12. 2. 5 ><12. 2. 6 >でも示される。後者はナーガブッディの『マンダラ儀軌二十』からの引用である。また、垂直ではなく水平方向に3 倍となる説も<12. 3. 4 >で著者は紹介するが、ここではそれは意図されていない。「知識ある者たち」が具体的に誰を指すのかは不明。

<sup>64</sup> 「1ハスタなどの大きさの円」は根本線を引くための補助的な円である。この円と梵線が交わる点を、根本線は通る。次の文で「円の大きさの東の根本線」とあるので、円の直径は根本線と同じ32マートルであることがわかる。1ハスタというのは便宜上示した数値で、実際にはマンダラの大きさに左右される。1ハスタが32マートルに相当する場合、マンダラ全体の直径はその3 倍の3ハスタとなる。この円を引くことで、根本線を引く位置が決定し、さらにその長さが32マートルと確定していることから、根本線の両端を対角線に接するようになれば、正しい位置に根本線を引くことができる。また、はじめの円は4本の根本線で形づくり一辺32マートルの正方形に内接することになる。

<sup>65</sup> (1ハスタなどの大きさの円が・・・南の根本線を墨打ちせよ)

はじめに南東で東の根本線を引き、北西に移動し、西と北の根本線を引き、ふたたび南東に戻り、南の根本線を引く。なぜはじめに南の根本線も引かないかは不明。

*Jayabhadra, Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2192, Vol. 51, 281.2.6-7. [NRC 112.4]

rlung dang dbang ldan mtshams gnas dang // me dang bden bral mngon phyogs te //  
sngags pas mtshams kyi thig gnyis ni // ji lta'i rim pas brkyang la gdab //

*Kṛṣṇa, Bhagavacchrīcakrasaṃvaramaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2164, Vol. 51, 211.4.7-5.2. [NRC 112.4]

g'yon nas bskor la shin tu brtson // rlung dang dbang ldan phyogs gnas la //  
me dang bden bral kha bltas te // bla mas 'tshams su thig gnyis ni //  
me'i phyogs nas brtsams te gdab // byang du mngon par bltas gyur nas //  
me'i phyogs su thig gdab po // nub kyi phyogs su bltas nas ni //  
bden bral du ni srad phu bre // rlung gi phyogs su gnas byas la //  
lho phyogs su ni bltas pa yis // nub kyi thig ni gang yin pa //

*Kambala, Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalopāyikā ratnapradīpodyota*, TTP, No. 2161, Vol. 51, 193.5.7-194.1.3. [NRC 112.4]

shar gyi rtsa ba'i thig go // ... nub phyogs kyi rtsa ba'i thig gdab po // ... lho phyogs kyi rtsa ba'i thig gdab po // ... byang phyogs gi rtsa ba'i thig go //

SUT, chap. 17, v.24 (Tsuda 1974 : 121). [NRC 112.4]

paścimaṃ dakṣiṇaṃ sthānaṃ niyamaṃ gurusamsthitaṃ /  
pūrvottaradiksthāne śiṣyas tiṣṭhet samāhitaḥ //

*Dārikapāda, Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalavidhi-tattvāvatāra*, TTP, No. 2146 Vol. 51, 166.5.1-3. [NRC 113.1]



g'yon nas skor ba'i sbyor ba yis // rnam pa kun du thig gdab bya //  
 mtshams kyi cha ni g'yas su ste // me dang rlung gi phyogs gnas nas //  
 srin po 'byung bo'i phyogs 'dug nas // gnyis pa ying ni de bzhin no //  
 me yi mtshams nas byang du blta // shar gyi thig ni gdab par bya //  
 rlung nas lho ru kha bltas te // nub tu srad bus gdab par bya'o //  
 slob dpon rlung nas shar du blta // byang du thig ni yang dag bri //  
 me nas nub phyogs kha bltas pas // lho yi thig kyang de bzhin no //

Ratnarakṣita, *Śrīsaṃvarodayamahātantrarājasya padminī nāma pañjikā*, TTP, No. 2137, Vol. 51, 98.2.3. [NRC 113.1]

skor ba ni thams cad du g'yas skor gyis chos thams cad mnyam pa nyid du lhag par mos pas so //  
 Sarahapāda, *Śrībuddhakapāla nāma maṅḍalavidhikrama-pradyotana*, TTP, No. 2529, Vol. 58, 107.2.1. [NRC 113.1]

g'yon nas bskor ba shin tu brtson //

Kṛṣṇa, *Bhagavacchrīcakrasaṃvaramaṅḍalavidhi*, TTP, No. 2164, Vol. 51, 211.4.7-8. [NRC 113.1]

g'yon nas bskor la shin tu brtson //

Tathāgatavajra, *Śrīsaṃvaramaṅḍalavidhi*, TTP, No. 2226, Vol. 52, 78.2.4. [NRC 113.1]

blo ldan dang bcas g'yon skor du //

VDT, TTP, No. 18, Vol. 2, 134.4.2. [NRC 113.1]

'dir ni slob dpon slob ma dag // g'yas phyogs su ni bskor bar bya //

Jayabhadra, *Śrīcakrasaṃvaramaṅḍalopāyikā*, TTP, No. 2192, Vol. 51, 281.2.5-6. [NRC 113.1]

de nas slob dpon sgrub grogs dag // bskor zhing 'gro ba'i bya ba ni //  
 g'yon pa'i spyod pa gtso bo'i phyir // kun tu g'yon pa'i cho gas bya //  
 de ltar na yang bltos pa yi // rtogs par dka' bas g'yas skor du //

Jayasena, *Śrīdākārṇavatāntrābhīṣekavidhi*, TTP, No. 2235, Vol. 52, 135.2.5-6. [NRC 113.1]

bskor ba yis ni der 'gro ste // slob dpon dang ni grogs po dang //  
 g'yon pa'i spyod pas gtso bo'i phyir // g'yon pa'i cho ga thams cad du'o //  
 de ltar na yang bltos pa yis // rtogs par dka' bas g'yas bskor bya //

<sup>66</sup> VPT, TTP, No. 11, Vol. 1, 232.2.2-3. [NRC 112.3]

dang por tshangs pa'i thig dang ni // gnyis par 'tshams kyi thig dang yang //  
 gsum par ngos bzhi yi ni bzhi // thig ni rab tu gdab par bya //

Dārikapāda, *Śrīcakrasaṃvaramaṅḍalavidhi-tattvāvatāra*, TTP, No. 2146 Vol.51, 166.4.6-5.1. [NRC 112.3]

dang por tshangs pa'i thig gdab po // ... mtshams kyi thig ni yang dang brtsam //

Kṛṣṇa, *Bhagavacchrīcakrasaṃvaramaṅḍalavidhi*, TTP, No. 2164, Vol. 51, 211.4.6-7. [NRC 112.3]

sa la tshangs pa'i thig gnyis gdab // ... bla mas 'tshams su thig gnyis ni //

Sarahapāda, *Śrībuddhakapāla nāma maṅḍalavidhikrama-pradyotana*, TTP, No. 2529, Vol. 58, 107.1.2-4. [NRC 112.3]

sa la tshang pa'i thig gnyis gdab // ... bla mas mtshams su thig gnyis gdab // ...  
 shar gyi thig ni gang yin pa // brtul zhugs can gyis cho gas gdab //

Jayasena, *Śrīdākārṇavatāntrābhīṣekavidhi*, TTP, No. 2235, Vol. 52, 281.2.4-3.1. [NRC 112.3]

sa yi gzhi ni de nyid la // tshangs thig gnyis ni yang dag par // ...  
 sngags pas mtshams kyi thig gnyis ni // ji ltar rim pas brkyang la gdab // ...  
 de yis dbang po'i phyogs thig gdab // ... nub kyi phyogs thig gdab par bya //...  
 mkhas pas byang gi phyogs thig gdab // ... lho yi phyogs thig btab nas ni //

Kambala, *Śrīcakrasaṃvaramaṅḍalopāyikā ratnadrapīpodyota*, TTP, No. 2161 Vol.51, 193.5.6-7. [NRC 112.3]

shar dang nub tu tshangs pa'i thig gdab par bya'o // shar du mngon par phyogs pa dang lhor mngon par

phyogs pa dang / thabs gcig tu lho dang byang gi thig gdab par bya'o // mer gnas pa'i gnod sbyin tu bltas pa dang / dbang ldan du gnas pa yi dags su bltas pas ni shar gyi rtsa ba'i thig go //

Nāgabuddhi, *Śrīguhyasamājamaṇḍalopāyikā-viṃśatividhi*, TTP, No. 2675, Vol. 62, 14.4.4. [NRC 112.3]  
sngags 'dis sngar bzhin tshangs skud sogs //

Dīpaṅkarabhadra, *Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2728, Vol. 65, 39.5.4-6. [NRC 112.3, 112.5-113.1]

blo ldan nam mkha'i thig gdab ste // de bzhin 'og tu thig par gdab // ...  
dang po shar dang nub byang lhor // phyogs kyi phyi rol srad bu gdab //  
me dang bden bral phyogs gnas te // mtshams kyi srad bu'ang yang dag gdab //  
shar lho nub byang de bzhin du // byas pas dkyil 'khor brgyad du 'gyur // ...  
dbang ldan las ni lcags ri dag // rang dang rjes mthun g'yas nas bskor //  
mkhas pas thig gis thig gtab nas // phyogs kun mnyam pa nyid du bya //

Bhavabhadra, *Śrīvajradāka nāma mahātantrarājasya vṛtti*, TTP, No. 2131, Vol. 50, 88.3.3-4. [NRC 112.3]

sa la yang tshangs pa'i thig gnyis btab la / slar yang slob dpon me mtshams dang lrung mtshams su gnas nas / gnod sbyin dang yi dags dang dbang po dang klu'i phyogs mams su thig gdab par bya'o // de nas yang me mtshams su gnas te rlung gi mtshams su thig gdab pa dang / bden bral du gnas te dbang ldan gyi bar du srad bu brkyang bar byas la /

Divākaracandrapāda, *Śrīhrerukabhūta nāma maṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2390, Vol. 56, 227.4.4-5.1. [NRC 112.3]

de nas bskor ba'i 'gros kyis lho phyogs nas 'dug la byang phyogs su kha phyogs pa dang / slob ma ni byang phyogs 'dug la kha lho ru phyogs pa dang lhan cig pas de bzhin du tshangs thig gdab par bya zhing de bzhin du 'og tu yang thig gdab par bya'o // ... shar gyi cha'i thig gdab par bya'o // ... nub kyi cha'i thig gdab par bya'o // ... byang phyogs kyi cha'i thig gdab par bya'o // ... lho'i cha'i thig gdab par bya'o // ... tshams kyi thig gdab par bya'o //

<sup>67</sup> ここは門の部分の指すとともに、門の大きさの規定にもなっている。この後、門の大きさはマートルラとともにマンダラの墨打ちの基本の長さとなる。

VPT, TTP, No. 11, Vol. 1, 232.2.1.

'khor lo yi ni brgyad nyid kyi // cha yi sgo ni rab tu grags.

VDT, TTP, No. 19, Vol. 2, 134.4.4.

sgo ni dkyil 'khor brgyad cha ru //

<sup>68</sup> 出典不明。

<sup>69</sup> 各根本線の中央部分4マートルラは、門の開口部に相当するため線は必要ではない。そのため、あらかじめ消しておくのであるが、その根拠を著者はあわせて示す。

<sup>70</sup> 対角線に対して45度の角度で伸びる。根本線とは平行。

<sup>71</sup> 図5に示されたそれぞれの区画の上の線がここでは示される。線の名称には区画の名称が用いられているのである。

<sup>72</sup> ヴェーディーの区画の端を示す2マートルラの線。この線には特定の名称が与えられていない。

<sup>73</sup> 「4番目の線」は宝の線(c)から数えて4番目という意味である。この線は楼閣のもっとも外側の線で、側面線に一致する。そのため門やトーラナでさえぎられることなく、対角線から対角線まで伸びている。

<sup>74</sup> 各区画の外側の線を指す。ここでも区画の名称が線の名称になっている。nの線は門の三方を取り囲むように引かれる線であるが、そのうち、垂直の2本(n')をここでは指す。

<sup>75</sup> ラジャスは外壁の最下層(a)の名称で、この部分と連続している。

<sup>76</sup> この場合の「マンダラ」は楼閣を指すと考えられる。

<sup>77</sup> 「ポーリー」の意味は不明。チベット訳は「闇の帯、暗黒の帯、空の帯、隙間の帯と呼ばれる」(mun pa'i snam bu dang / long ba'i snam bu dang / stong pa'i snam bu dang / bar snang skabs kyi snam bu)と4種類の名称をあげる。NRC(114.4.2)によれば、このうち「空の帯」(stong gi snam bu)はラトナラク

シタの説。

<sup>78</sup> (8 マートルのシリースーチャカの線)

Ratnarakṣita, *Śrīsaṃvarodayamahātantrarājasya padminī nāma pañjikā*, TTP, No. 2137, Vol. 51, 98.3.1-2. [NRC 119.2]

cha chung bryad pa'i steng du gdung // cha chung bcu par shes par bya //

<sup>79</sup> 根本線とラジャスの線 (*a*) の間の幅1 マートルの区画で、五色の顔料 (*rajas*) を用いて、帯状に彩色するところから付けられた名称であろう。根本線は門の部分では門扉 (*j*)、カポーラ (*k*)、パクシャ (*l*)、シリースーチャカ (*m*) と続く。

<sup>80</sup> スカンダ (*n*) とそれに垂直に続く2本の線 (*n'*)、アンタラーラ (*i*)、側面線 (*f*) などによって囲まれ、門の字型をした幅1 マートルの部分。これまでの線を引くことのできる。実際にはなにもない部分であるため、中間部分と呼ばれる。なお、中間部分の原語である「アンタラーラ」は、寺院の拝殿 (*maṇḍapa*) と本堂 (*garbhagrha*) との間に置かれた前室を示す建築用語でもある。

<sup>81</sup> 一辺32マートルの根本線の正方形、すなわち根本マンダラの部分を指す。

<sup>82</sup> ヴェーディカーはヴェーディーと同じで、図6の *a*, *b*, *b'* で囲まれた部分を指す。門の部分でヴェーディカーはとぎれているので、門には含まれない。なお、建築用語の「ヴェーディー」は、寺院などの建造物では基礎部の最上層に相当し、柱や壁などを支える部分である。アンタラーラ、ヴェーディー等、インドの寺院建築で用いられるこれらの用語については、岐阜市立女子短期大学の矢口直道氏よりご教示いただいた。

<sup>83</sup> 根本線の内側の幅4 マートルの区画を指す。

<sup>84</sup> 瓔珞半瓔珞は図6の *c* と *d* にはさまれた部分を指す。その他の3つは、具体的にどの部分を指すか不明。

<sup>85</sup> Dipaṅkarabhadra, *Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2728, Vol. 65, 40.1.3-4.

sgo ni 'khor lo'i bryad cha ste // kha khyer med pa nyid du 'dod //

sgo khyud sgo yi tshad yin te // lha yi rnam bu'ang de yi tshad //

de phyed kha khyer kun nas bskor // logs dang 'dram ni de bzhin te //

dra ba dra phyed nyi zla dang // dar sogs snam bu tshad de bzhin //

tshon gyi sa ni de yi phyed // rtsa ba'i thig sa'i phyi rol du'o //

<sup>86</sup> 出典不明。

<sup>87</sup> 出典不明。チベット訳は「～と説かれていることに矛盾する」 (*ces bshad pa dang 'gal lo*)。

<sup>88</sup> 中間部分 (*antarāla*) は門の字型なので、垂直方向には5マートルで、水平方向には12マートルある。

<sup>89</sup> 前節の<12. 2. 1><12. 2. 2>で説明された門と、ここで説明されるナーガブッディ所説の門の違いは、シリースーチャカ (*m*) とスカンダ (*n*) の線がないことである。そのためカポーラ (*k*) とパクシャ (*l*) がここでは2マートルではなく、4マートルになる。「パクシャの2本に接する線」は、パクシャの上端をつないだ12マートルの線で、側面線と重なる。これを前節のシリースーチャカと見なすという見解を著者は示す。

<sup>90</sup> この文章は既出の偈と同じ。複数の写本が *paṭṭikās* ではなく *paṭṭikā* (あるいは *paṭṭikā*) とするが、前の偈と同様、*paṭṭikās* と読む。各方角のこの部分をそれぞれ *paṭṭikā* と呼び、四方に合計四つあるので複数形にするのであろう。

<sup>91</sup> テキストは *raṅga*。意味は *rajas* と同じ。

<sup>92</sup> 「他の経典」が何を指すのか不明。ナーガブッディの『マンダラ儀軌二十』の該当箇所とテキストは以下の通り。

Nāgabuddhi, *Śrīguhyasamājamaṇḍaopāyikā-viṃśatividhi*, TTP, No. 2675, Vol. 62, 13.2.5-8.

sgo ni 'khor lo'i bryad cha ste // lha yi snam bu de bzhin no //

sgo khyud sgo yi tshad du ste // de bzhin 'dram dang ngos kyar ngo //

de yi phyed du kha khyer ro // kha khyer phed du tshon gyi sa // ...

dra ba kha khyer tshad du 'gyur // rin chen pha gu de phyed du //

'ba' li dang ni mda' yab dang // phyi rol ka ba'i sa de bzhin //

- <sup>93</sup> この段落の議論の意味するところは不明。ナーガブッディの説にしたがった門の場合、パクシャの線は楼閣の外郭（側面線に相当）のところまで伸びているので、さらにその外側1マートラのところにアーサーラと外廊のための線を引いたならば、根本線から8マートラの中に収まらなくなってしまうということか。はじめのような考え方が誰によるのかも不明。「偉大な学者」が説くという根本マンダラの定義は、これまでも<12. 1. 6>で紹介されている。
- <sup>94</sup> 前節までで説明された門の場合、門扉の長さは4マートラで、2マートラのカポーラとパクシャの2倍であるが、ナーガブッディの説の門の場合、三者の長さはいずれも4マートラで一致している。
- <sup>95</sup> 「上部が切られた」(chinnamastaka) という状態が、具体的にどのような形態を示すかは不明。建築における欠陥を指す専門用語か。
- <sup>96</sup> この段落で述べていることは、外廊が必要かどうかということである。ナーガブッディ所説の門のように、外廊の一部が門のところで途切れているマンダラも存在し、それは複数の経典において門扉などの長さの規定が一致しないことに起因する。しかし外廊がまったくなく、バクリーが楼閣の装飾になるような構造は好ましくないということであろう。
- <sup>97</sup> 大寺院などで見られるのが、何であるのか不明。外廊がない建造物か。
- <sup>98</sup> ナーガブッディ所説の門の場合、アンチャラという用語は用いられていなかったが、前節で説かれた柱と同様、柱の外側の5マートラの線を指すのであろう。図6に見るように、外廊はこの部分までしか描かれないが、マンダラを観想する場合はパクシャの線まで及んでいると著者は主張する。
- <sup>99</sup> *Śrīvajramālābhīdhānamahāyogatantrasarvatantrahṛdayarahasya vibhāṅga* (TTP, No. 82, Vol. 3, 203.2.1-231.4.2) を指すと考えられるが、該当箇所不明。
- <sup>100</sup> シリーはパクシャの上端にはさまれた12マートラの線で、図6に見るように、その先端はトーラナの柱から1マートラ離れたところにある。しかし、観想上のマンダラではシリーの裏側、すなわち下にトーラナの柱を観想すると主張する。
- <sup>101</sup> この規定はSTTSをはじめ、さまざまな密教経典に登場する。ただし、引用されている文は連続して登場するのではなく、前半の「四角で4つの門をそなえ」と後半の「8本の柱で飾られる」が分断されていたり、さらに細かく分かれる場合もある。またSTTSでは「8本の柱で飾られる」の部分はマンダラ全体の説明ではなく、内陣の説明の箇所で見れる。

STTS (堀内 1980 : 110-111)

caturasraṃ caturdvāraṃ catustoraṇāśobhitam /  
 catuḥsūtrasamāyuktam paṭṭasragdāmbhūṣitam // ...  
 tasya cakrapratīkāśaṃ pravīśyābhiantaraṃ puram /  
 vajrasūtraparikṣiptam aṣṭastambhopaśobhitam //

*Pañcakrama* (Poussin 1896 : 2)

caturasraṃ caturdvāraṃ catustoraṇāśobhitam /  
 catuḥsūtrasamāyuktam aṣṭastambhopaśobhitam //

HVT (Snellgrove 1959 (vol 2) : 36)

ity āha maṇḍalaṃ śāstā catuṣkoṇaṃ samujjvalaṃ /  
 caturdvāraṃ mahādīptaṃ hārārdhahārabhūṣitam /  
 śrākcitracāmarair yuktam aṣṭastambhopaśobhitam //

- <sup>102</sup> アバヤーカラグプタは「8本の柱で飾られる」という規定が、すべてのマンダラに適用されることを前提とするため、トーラナの柱をこの規定の「8本の柱」に相当すると述べる。しかし、前注でも述べたように、STTSでは「8本の柱」はアバヤーカラグプタが否定するマンダラの内陣の柱を指している。
- <sup>103</sup> 観想上のマンダラの場合、シリーの下にトーラナの柱を観想するが、実際はこの柱はトーラナを支え

ているだけで、楼閣や門の一部ではない。

<sup>104</sup> トーラナの柱を門の一部と理解し、門扉などと同様に門の付け根から垂直にのびているという考えを否定しているのであろう。この説を唱えているのが誰であるかは不明。

<sup>105</sup> 瓔珞や半瓔珞をかけるための特別の留め具か。

<sup>106</sup> 典拠不明。

<sup>107</sup> これまで述べてきたのは、線の長さがそれぞれ決まっているため、無駄な線を引かずに必要な線のみを引くという方法である。そのため各線は途中で途切れているように見えるので、このように呼ばれるのであろう。

<sup>108</sup> これらの線は、ラジャス (a) から外廊 (f) までの水平の線になる。

<sup>109</sup> 前の6本の線に対して垂直にひく線で、門扉からアンチャラまでの線となる。「第6の線」は根本線と平行に引かれた6本の線の最後の線。

<sup>110</sup> 梵線から2マートラ離れた1本目の線は門扉に相当する。

<sup>111</sup> 7本の線を1マートラ間隔で引くことから、ここではナーガブッディ所説の門ではなく、前節の第1のタイプの門を想定して説明していることがわかる。ナーガブッディの門の場合、第3と第4の線ははじめから必要ないからである。

<sup>112</sup> 碁盤目を最初に作り、必要な線のみを残して不要な線を消すこのような方法は、チベットでは一般的なようである。たとえば田中(1987:119)や Ron tha (1971-3)の図などにみられる。なお田中(1987:119)の図は楼閣の高さが13マートラとなっているが、これは「トーラナは門の3倍」すなわち12マートラという規定に合致しない。

<sup>113</sup> 引用文の前半部文はディーパンカラバドラの『マンダラ儀軌四百五十頌』に含まれる。

Dīpaṅkarabhadra, Śrīguhyasamājamaṅḍalavidhi, TTP, No. 2728, Vol. 65, 40.1.4-5.

rta babs sgo yi sum 'gyur te //

<sup>114</sup> 出典不明。金はトーラナの一番下の層を指す。ここを「アーサーラ」と呼ぶ説もあることを紹介する。アーサーラは<12. 2. 1>ではスカンダの線 (n) の別名として「シリーを伴ったアーサーラ」と、また<12. 2. 3>では著者によって否定される説の一部にすでに登場している。

<sup>115</sup> この段落は水平方向の線分の長さの規定。一番下の帯の長さを2.5マートラとまず定め、その上の線(第1説のトーラナでは金とバクリーとの間の線)を「第1の線」と呼び、以下11番目の線まで順に規定する。トーラナの内側に空間を作るため、第2から第6の線は梵線から一定の長さを離れて引かれる。

<sup>116</sup> 第5の帯である「アンダカーラ」はその上下の帯よりも短い。第5の帯の上の線と第6の帯の下の線は同じ線であるが、実際は第5の帯に属する部分は3.5マートラしかない。つぎの文章の第7の帯も「アンダカーラ」と呼ばれ、同様に、第8の帯に比べて両端が1マートラ短い。これらはつぎに述べる垂直方向の線を引く時に必要な情報である。。

<sup>117</sup> 第1の線、すなわち一番下の帯の上の線は第2の線よりも0.5マートラ長い。そのため「第1の線の[梵線寄りの端から外側に向かって]0.5マートラ離れたところ」は、トーラナの内側の端を表す線のはじめの位置となる。つぎの段階でこれと平行に0.5マートラ離れて同じような線を描くことで、0.5マートラの階段状の帯が描かれることになる。

<sup>118</sup> トーラナが一番下の層をアバヤーカラグプタは第一説のトーラナでは「金」と呼んできたが、「アーサーラ」という説があることも、前の段落でふれている。その場合、この帯の幅が16マートラとなるということであろう。これまでの説明では第一の層は左右に2.5マートラずつの長さしかなかったが、アーサーラとする説の場合、この層と第二の層の間の水平の線を途切れさせずに16マートラ引き、ひとつつながりの層とするのであろう。

<sup>119</sup> この偈では括弧で補ったように、特定の用語を用いてトーラナの各層の幅を示している。下から順に、16、18、18、18、12、16、10、14、14、14、10である。これらの数は中央の空間の部分も含む。出典は不明。

- <sup>120</sup> この場合の「中間部分」は第2層から第6層までの中央部の空間を指す。門の場合と同様、この部分は何もないので、同じ名称が用いられるのであろう。前の注にも述べたように、第2層のバクリーから第6層のヴァランダまでは、この部分は実際にはないのであるが、引用した偈ではその部分を含む18マートラなどの規定があるので注意を喚起していると考えられる。この文章の出典も不明。
- <sup>121</sup> 連珠のような装飾品であろう。
- <sup>122</sup> ここではバーギカはマートラと同義。この節の後半では同じ「バーギカ」をバーガと同じ意味でも用いている。チベット訳はここでは cha を、後半では cha chen をあてて区別する。
- <sup>123</sup> 出典不明。
- <sup>124</sup> *Vimalaprabhā, Abhiṣeko nāma tṛtīyaḥ patalaḥ, Maṅgalavartanaṃ nāma mahoddeśa* (Rinpoche 1994: 53)  
caittacakrasya viśuddhyā savyāsavye cakrasya mṛgo mṛgīti.
- <sup>125</sup> 出典不明。
- <sup>126</sup> ナーガブッディの『マンダラ儀軌二十』からの引用。  
Nāgabuddhi, *Śrīguhyasamājamandalopāyikā-viṃśatīvidhi*, TTP, No. 2675, Vol. 62, 13.2.8-3.1.  
bum pa ka ba'i steng gnas pa // rta babs sgo yi sum 'gyur te //  
mda' yab dang ni bya 'dab dang // ldan zhing dril bu nges par 'khrol //
- <sup>127</sup> トーラナの上に位置するつがいの鹿が、外廊の上にいるか、あるいは外廊にはさまれているかという違いはあっても、外廊がないことは認められないことを、著者は主張している。
- <sup>128</sup> ここで用いられるバーギカはバーガと同じで、1バーギカが門の大きさすなわち4マートラである。一部のサンスクリット写本は bhāgika ではなく mahābhāgika とする。マートラと同義として用いられている上述の bhāgika と区別するための変更であろう。
- <sup>129</sup> 「周辺部を含むマンダラ」(saparikarapaṇḍala) は外壁を含む一辺48マートラ (=12バーギカ) のマンダラの楼閣部分を指す。これに対し、外壁の内側の32マートラの正方形は「中心のマンダラ」(garbhamāṇḍala) や「根本マンダラ」(mūlamāṇḍala) とも呼ばれる。羯磨杵の中心部分(臍)がこの48マートラの正方形に一致し、「周辺部を含むマンダラの基礎部」になっている。
- <sup>130</sup> 門の大きさであるバーギカは4マートラなので、その4つ分は16マートラになる。楼閣の外壁の外側の線すなわち側面線から、蓮華の花芯の端すなわち外周部の蓮弁の内側の線までの梵線の長さに相当する。マンダラの半径は48マートラで、このうち楼閣部分24マートラと外周部8マートラを引くと、16マートラになるからである。この部分が楼閣と外周部の間隔がもっとも大きいところとなる。これが羯磨杵の鉗の長さに相当するが、14マートラとする説を採ると、2マートラ不足する。
- <sup>131</sup> <12. 1. 6>で、側面線からマンダラの最外周までの24マートラの内訳を示した箇所を指す。
- <sup>132</sup> キーラカ(キーラ kīla) は結界などで用いる楔状の道具。日本密教の檣に相当する。
- <sup>133</sup> 突き刺しのマントラと打ち込みのマントラは第8儀軌「妨害者にキーラを打つ儀軌」(vighnakīlanavidhi) の中で示されている。前者は om vajrakīla kīlaya sarvavighnān hūṃ、あるいは om gha gha ghāṭaya ghāṭaya sarvaduṣṭān phaṭ phaṭ phaṭ kīlaya sarvapāpān phaṭ phaṭ hūṃ hūṃ hūṃ vajrakīlaya vajradhara ājñāpayati sarvavighnānām kāyavākcittaṃ kīlaya hūṃ hūṃ phaṭ、後者は om vajramudgara ākoṭaya hūṃ。拙稿(1992: 98-99) 参照。
- <sup>134</sup> マンダラ全体の直径が96マートラなので、二重にして半径48マートラの円を引く。
- <sup>135</sup> サンスクリット写本には aiśānyādiśa ārabhya と aiśānyādiśam ārabhya のふたつの読みがあるが、前者をとる。
- <sup>136</sup> 外周部の円を描くため、キーラを用いて糸を固定し、これをコンパスのようにして線を引く。前の <12. 2. 6>で説明した羯磨杵の鉗の先端と蓮弁の内側の線は接しているので、この線をはじめに引くのである。  
(下が独鉗で上が五鉗で・・・右回りに引く)
- Kambala, *Śrīcakrasaṃvaramaṅgalopāyikā-ratnapradīpodyota*, TTP, No. 2161, Vol. 51, 194.1.6. [NRC 115.2]  
dkyil 'khor du phur bu btsugs la dbang ldan gyi mtshams nas rdo tje'i ra ba dang 'bar ba'i ra ba cha chung re

res bskor ro //

- 137 法源はマンダラには描かれないが、蓮弁の外側の線が法源の上端を表し、これを「法源の部分を表す線」と呼ぶようである。
- 138 典拠不明。法源と法界を同一視している。
- 139 典拠不明。鉄囲輪は須弥山を中心とした世界観で、世界の周囲を取り巻く鉄製の山脈。次の段落で、著者は蓮弁の次の区画である金剛杵輪が鉄囲輪に相当するという立場をとり、蓮弁の外の線が鉄囲輪であるというこの説はとっていないようである。
- 140 この部分は意味が明らかではない。火炎輪の中は5色で塗り分けるため、それぞれが同じ大きさになるように分割するということか。
- 141 アーナダガルバの SVU からの引用。本文は以下の通り（密教聖典研究会 1987:40）。

prabhāmaṇḍalaṃ saṃsūtrya tasya bahiś cakravāḍaṃ tathaiva vartulaṃ saṃsūtrayet.

- 142 Skt. guṇarajas, Tib. tshon gyi re khā. 具体的に何を指しているのか不明。
- 143 アーナダガルバの SVU に従えば、マンダラの外周は火炎輪と鉄囲輪の二重で構成されるため、それ以外に「ラジャス」の区画は必要ではないという意味か。著者は概してアーナダガルバの説に否定的な立場をとる。
- 144 (わずかに横に伸び)

Tathāgatavajra, *Śrīsaṃvaramaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2226, Vol. 52, 79.1.8-2.1. [NRC 117.2]

g'yas g'yon gyi ra ni rta babs kyi gzhogs nams su dar dpyangs kyi snam bu'i steng du chu srin gyi kha nas 'thon te / cung zad thad kar song nas phyir byung ba dbus kyi rgyar cha chung gsum pa srid du cha chung bcu drug pa'o //

- 145 羯磨杵の鉦は円弧を描くため、楼閣からはアンチャラの上のあたりで姿を現し、外にふくらんだ後、内側に湾曲して梵線の近くで中央の鉦と接する。16マートルという長さは、<12. 2. 6>で示された中央の鉦と同じであるが、幅3マートルというのは、鉦のもっとも太い部分であろう。
- 146 通常の羯磨杵は鉦の部分が三鉦であるが、五鉦にする場合、重ねるように描くという規定。
- 147 bhitti は建造物の外壁部を表す用語であろう。図6では宝の下の線 (b) から外廊の上の線 (f) までを指す。外壁の線はトーラナの柱の線の始点であるので、宝の下の線 (b) と同じであろう。
- 148 (楼閣より少しだけ離れたところで・・・ヴェーディーの上に乗っているからである)

Smṛtījñānakīrti, *Guhyāpannopāyikāsūtravidhi*, TTP, No. 3412, Vol. 75, 189.3.8-4.1. [NRC 117.5]

rta babs ya phubs dag las (D. la) ni // cha gcig dor ba'i cha chen tshad //

sgo yi mtshams dang twa ra na // shin tu gcig nyid mi bya'o //

- 149 「トーラナの柱は外壁の線から出て、7マートル分である」という説が誰のものであるか不明。これまでの説明にしたがえば、実際のトーラナの柱は幅1マートル、高さ5マートルである。高さが7マートルになると、2マートルはみ出ることになる。ヴェーディーの層はそれより上の外壁の4層（宝～外壁）よりも門の方に5マートル長く描かれる。トーラナの柱はその上に接して描かれるが、これはトーラナがヴェーディーの上に乗っているからであると説明する。ヴェーディーは建造物の基壇部の一番上の層を示す建築用語で、壁や柱がその上に置かれる。マンダラの楼閣でも同じような役割を果たしているであろう。なお、ここで否定されている説のように、トーラナの柱が外壁よりも高いところまで描かれている作例が、チベットのマンダラに散見される。
- 150 「垂直方向の中間部分の帯は、高さが門ふたつ分 (=8マートル) より4分の1マートル短い」すなわち、7.75マートルであるという説が誰のものであるか不明。門とトーラナの間に描かれる中間部分は門の字型で表され、垂直方向の高さは柱と同じ5マートルである。柱が7マートルという説と同様、この部分がそれよりも長い7.75マートルという説を否定している。中間部分の大きさについては図5と<12. 2. 2>の最後の段落参照。
- 151 以上の説と、次の段落から始まる第二の説を著者は説いている。
- 152 根本線で形作られる根本マンダラは、一辺が32マートルである。これまでの説の場合、梵線は96マ

トラであったが、これから説明する「第二の説」のマンドラでは、梵線は64マートラである。

<sup>153</sup> 梵線上に32マートラの印を付ける。中心から左右にそれぞれ16マートラのところ4箇所印を付けるのであろう。なお、この偈のはじめの2パーダ (brahmasūtrasya aṣṭabhis tu mahābhāgair ekaikaṃ pārśvam aṅkayet) は21シラブルからなり、シュローカよりも5シラブル多い。句の終わりの5シラブルに相当するpārśvam aṅkayetの部分を除くと、シュローカとしては韻律が不適格となる。句の途中の tu mahābhāgairを除けば、8シラブル2パーダで、韻律もシュローカに合致する。この部分はなくとも意味は通じる。チベット訳は7シラブル2パーダに収めている。

<sup>154</sup> ここでは大部、小部、寂静という3種の単位の定義を行う。このうち大部が門の大きさ、小部がその4分の1で、これまでのマートラに一致する。したがって寂静は0.5マートラになる。この引用文の典拠は不明。

<sup>155</sup> マンドラを描く土地として、正方形の土地を準備するということであろう。

<sup>156</sup> なぜ「2倍以上」(dviguṇādhika)であるのか不明。糸の長さが「マンドラ」の2倍であることは、<12. 1. 3>でも述べられている。

<sup>157</sup> Skt. uttarah sādhaḥ. 「助手」を表す語は uttarasādhaḥ であるが、二つの語に分けられている。おそらく韻律の関係であろう。

<sup>158</sup> Skt. temayet. 白梅檀の香水で米の粉を溶き、これに糸を浸したのであろう。

<sup>159</sup> この場合の「輪」は根本マンドラの大きさである直径32マートラの円である。この円と梵線との交点が、根本線と梵線の交点にもなる。類似の規定はすでに<12. 1. 7>にあるが、ここでは円を引いてからその2倍の長さの梵線を引くように述べ、<12. 1. 7>とは順序が逆になっている。

<sup>160</sup> NRC (113. 5. 7) によればジャヤバドラのマンドラ儀軌からの引用。

Jayabhadra, *Śrīcakrasamvaramaṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2192, Vol. 51, 279.2.7-3.1. [NRC 113.5]

gru bzhi byas pa dag pa la // dkyil 'khor las ni nyis 'gyur lhag //  
de nas skud pa dkar po byas // rang dang sgrub pa'i grogs dag gis //  
tsandan dmar po dang bsres pa'i // sā lu btags pas spang bar bya //  
dkyil 'khor tshad ni gyur pa'o // nyis gyur gyis ni thig gdab pa //  
dag pa'i tshangs thig gnyis gdab bya // de yi phyed 'gyur rtsa thig go //

<sup>161</sup> この墨打ちの方法では、蓮華の雄しべから火炎輪に至る外周部の部分は、梵線よりも外側になる。この場合の梵線は、これまで述べてきたように長さは64マートラである。

<sup>162</sup> 典拠不明。64マートラの円は蓮華の雄しべの内側の線、すなわち外周部の一番内側の線に相当する。

<sup>163</sup> この偈はナーガブッディの『マンドラ儀軌二十』からの引用。本文は以下の通り。

Nāgabuddhi, *Śrīguhyasamājamandalopāyikā-viṃśatavidhi*, TTP, No. 2675, Vol. 62, 13.3.2.

rta babs rdo rje'i rtse mo can // de yi phyi rol khor yug ste //  
rdo rje'i phreng ba 'od zer rgyas // [thig btab las grub 'gyur bya'o //]

第3パーダがVAの引用と異なる。この部分はサンスクリットとチベット訳のあいだでも一致せず、チベット訳は「妙なる光をそなえた金剛の輪」(rdo rje'i phreng ba 'od bzang ldan) となっている。

<sup>164</sup> ナーガブッディのマンドラ儀軌の偈を引用して、鉄困輪がトーラナの外側に描く外周部全体に相当することを著者は述べる。鉄困輪がトーラナのすぐ外にあり、それが金剛杵輪だけではなく、光などもそなえていると、偈の中で明記されていることが根拠となっている。

<sup>165</sup> ナーガブッディの偈では「蓮華の雄しべ」などが言及されていないことを根拠にした説。典拠は不明。

<sup>166</sup> 以下、前の説と合わせて「マンドラには羯磨杵はあっても蓮華はない」という説に著者は反駁する。『ピンディークラマ・サーダナ』を引用し、偈中の「智慧の大地」と「虚空界」を法界に、その「中心」を蓮華に解釈することで、蓮華が存在することを示す。著者が否定する「蓮華と法源はないが、それ(羯磨杵)はある」という説の典拠は不明。

<sup>167</sup> 『ピンディークリタ・サーダナ』(Piṇḍīkṛtasādhana) からの引用。Poussionによるサンスクリット・エディションは以下の通り。



[anayā gāthayā] sūnyam dhyātvā sthīracarātmakam (VA sthīracalātmakam) //

anena vidhiyogena jñānabhūmir adhiṣyate (VA adhiṣṭhyate) // (18)

ākāśadhātumadhyasthaṃ bhāvayed vāyumaṇḍalam // (19 ab)...

caturmaṇḍalasaṃhāre vajrabhūbhāgamaṇḍalam (VA°saṃhāravajrā) //

atra (VAtra) *bhrūṃ-kāraṇiṣpannaṃ kūṭāgāram vibhāvayed* // (23) (Poussin 1896: 2)

括弧内に示したように、VA の引用文とは一部に不一致がある。

- <sup>168</sup> 羯磨杵の臍は側面線で囲まれた部分に相当するので、一辺48マートルの正方形になる。類似の規定は <12. 2. 6>ですでに言及されている。また羯磨杵の鉤の長さは、<12. 2. 6>では16マートルとされていたが、この第二の説の場合、側面線から外周部（すなわち蓮華の雄しべの線）の間が8マートルしかないため、その長さが鉤の長さとなる。根本線で囲まれた部分は一辺が32マートル、その外側すなわち楼閣の外壁の厚さも8マートルであることは、第一の説でも第二の説でも共通である。トーラナの柱の間も、第一の説と同様12マートルである。また、中間部分は門を取り囲み、トーラナの柱に接する門の字型の部分であるが、これを描かないことも著者はあわせて説明する。
- <sup>169</sup> 第1、第2のタイプのトーラナが、いずれも12マートルの高さを有していたのに対し、このトーラナはその3分の1の4マートルの高さしかない。以下、このトーラナの形式を第3のタイプと呼ぶ。
- <sup>170</sup> 全体を合計すると門の大きさひとつ分、すなわち4マートルになる。トーラナの各層の名称と大きさに関するこの部分のサンスクリット写本は、同一語の繰り返しが多いため、誤記が多い。
- <sup>171</sup> 偈の中では散文の所で「ひづめ」と呼ばれた部分が「場所」になっている。各層の大きさの規定は散文と一致する。この偈の出典は不明。
- <sup>172</sup> <12. 2. 5>の第3段落で示されたトーラナの墨打ちとはほぼ同じ表現をとる。ただし、下から数えて第4と第6の層（いずれも名称は「金」）は、内側に入り込んでいるが、その端の位置が示されていない（<12. 2. 5>では明記されていた）。次の段落で見ると、この部分は端から端までが12マートルの説があるので、図9ではそれにしたがっておく。なお、カルカッタ（コルカタ）のアジア協会（Asiatic Society）が所蔵するVAのサンスクリット写本（Haraprasad Shastri 1917: 94, No. G3855）は、梵線からの距離や各線の長さについて、独自の読みを示す。相違点は以下の通り。第2、第3の線が4マートル離れ2マートル。第4の線が2マートル。第5の線が4.5マートル離れ3.5マートル。第6の線が3マートル。この読みにしたがった場合、トーラナは正しく描けない。この写本はしばしば独自の読みを示すことがある。
- <sup>173</sup> この段落とほとんど同一の内容が<12. 2. 5>の第4段落に含まれる。
- <sup>174</sup> 馬蹄形の模様を描くという意味であろう。
- <sup>175</sup> 上記のアジア協会所蔵のサンスクリット写本は「大部2.5」と読む。チベット訳は「3.5」。
- <sup>176</sup> これらの長さの規定は、金とマカラを逆にし、金を12マートル、マカラを14マートルにすると、前段落の内容に一致する（ただし前段落では金の水平方向の長さは規定されていない）。この偈の出典は不明。
- <sup>177</sup> この文章も<12. 2. 5>の最後の段落にほとんど一致する。趣旨も同じであるが、<12. 2. 5>では18マートルとされていたバクリーの長さが、ここでは16マートルになっている。これまでの説明では、第3のタイプのトーラナではバクリーが一番下の層であるため、その幅は14マートルであって16マートルではない。第1のタイプのトーラナの場合、バクリーが一番下ではなく、下から2番目の層に対する名称であった。おそらく、ここでも著者は第1のタイプのトーラナ各部の名称を念頭に置いて、下から2番目の層（第3のタイプでは「宝」の層）を「バクリー」と呼んだのであろう。
- <sup>178</sup> 外周部の内側は直径64マートルで、そこに48マートルの楼閣と4マートルずつふたつのトーラナがあるため、残りの部分は各方角4マートルずつである。その上に直径2マートルの法輪を描くのである。
- <sup>179</sup> 外廊の上の2頭の鹿については、すでに<12. 2. 6>で説明されている。
- <sup>180</sup> 金剛の先端部（vajrāgra）は金剛杵の鉤の部分を指すのであろう。三日月と宝と半分の金剛杵を組み合わせた独自の装飾は、楼閣の外壁のヴェーデーや瓔珞半瓔珞の区画にも描かれる（<12. 4. 1><

12. 4. 2 >参照)。傘蓋の柄の先端の装飾であろう。

181 この語に相当するサンスクリット sakamarūka は、意味が明らかでない。チベット訳の dar lce'i sham bu dang bcas pa'i に従って「絹の縁飾りのある」と訳す。

182 「寂靜」は0.5マートラに相当する。<12. 3. 1 >参照。柄の太さを表すのであろう。

183 出典不明。

184 出典不明。トーラナと外周部との間には4マートラの間隙があるだけなので、6マートラの傘蓋を描くためには、柄を曲げるなどの工夫が必要であらう。

185 蓮弁と金剛杵輪に相当する。なおチベット訳は「外のふたつの輪」(phyi rol gyi phreng ba gnyis) である。

186 (ラジャスの区画の・・・8つの屍林を描く)

VDT, TTP, No. 18, Vol. 2, 134.4.5-6. [NRC 115.1]

tshon gyi sa yi nyis 'gyur du // phyi yi 'od kyi dkyil 'khor bya //

'khor lo de yi phyi rol du // shing la sogs pa dur khrod bya //

SUT, chap. 17, v.36-45 (Tsuda 1974 : 123-124) [NRC 115.2, 116.4]

vajrapañjaramadhye tu śmaśānāṣṭakabhūṣitam //

Kambala, Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalopāyikā-ratnapradīpodyota, TTP, No. 2161, Vol. 51, 194.1.6. [NRC 115.1]

dkyil 'khor du phur bu btsugs la dbang ldan gyi mtshams nas rdo rje'i ra ba dang 'bar ba'i ra ba cha chung re res bskor ro //

Ratnarakṣita, Śrīsaṃvarodayamahātantrarājasya padminī nāma pañjikā, TTP, No. 2137, Vol. 51, 99.2.8-3.1. [NRC 115.2]

'od zer ni kha dog lnga pa'o // de'i phyi rol tu dur khrod mams bri bar bya'o //

AM, TTP, No. 2328, Vol. 55, 169.5.4-170.1.5. [NRC 116.4]

187 (巡り合わせのよくない時代には・・・描かない)

Tathāgatavajra, Śrīsaṃvaramaṇḍalavidhi, TTP, No. 2226, Vol. 52, 79.2.4-5. [NRC 115.2]

de'i phyir cha chung bzhi pa'i me ri'i thig go // khor yug de'i phyi rol du ni shing la sogs pa'i dur khrod bryad de // 'ong kyang skal ba dang mi ldan pa'i gnas su mi bya'o //

188 出典不明。前の段落の定義では、火炎輪の幅は2マートラである。第一説のマンダラの場合、火炎輪は4マートラである。<12. 2. 7 >参照。

189 屍林を描く場合の規定。実際の屍林の大きさについては明示されていない。

190 出典不明。おそらくこれはマンダラの外周部の定義ではなく、サンヴァラ・マンダラの三密輪の定義であらう。

191 (サンヴァラ・マンダラに・・・蓮華と車輪の輪を描くよう述べた)

Jayabhadra, Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalopāyikā, TTP, No. 2192, Vol. 51, 279.3.7-8. [NRC 115.1]

'od zer 'bar bas 'khrigs pa ni // rdo rje padma 'khor lo'o //

'khor lo gsum ni gang yin dgod //

Dārikapāda, Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalavidhi-tattvāvatāra, TTP, No. 2146, Vol. 51, 166.5.6-7. [NRC 115.2]

tshon gyi sa yi nyis 'gyur du // phyi rol 'od kyi dkyil 'khor bya //

'khor lo de yi phyi rol du // shing la sogs pa'i dur khrod bya //

Prajñārakṣita, Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalavidhi-saṃgraha, TTP, No. 2186, Vol. 51, 264.5.8. [NRC 115.2]

rdo rje ra ba me 'od bcas // dkyil 'khor de yi phyi rol tu //

shing la sogs pa'i dur khrod bya //

Ratnarakṣita, Śrīsaṃvarodayamahātantrarājasya padminī nāma pañjikā, TTP, No. 2137, Vol. 51, 99.2.8-3.1.

'od zer ni kha dog lnga pa'o // de'i phyi rol tu dur khrod mams bri bar bya'o //

192 <12. 1. 6 >にも示されたように「梵線はマンダラの二倍」という規定があるため、この第二の説のマンダラでは、一辺32マートラの根本マンダラ(周囲を含まない根本マンダラ)を「マンダラ」にあ

て、梵線は外周部の内側の円までの64マートラとする。「描かれるマンダラ」は後者を示す。根本マンダラを形づくる根本線を境に、マンダラの中心までと、外周部の内側の線まではいずれも16マートラで等しくなる。「梵線はマンダラの二倍」という同じ規定をもちながら、第一の説と第二の説でマンダラと梵線が指す内容が異なることは、著者自身が<12. 3. 7>の最後でまとめている。

<sup>193</sup> <12. 2>で示された第一の説。

<sup>194</sup> この偈はすでに<12. 2. 6>で登場している。また門扉とカポーラの長さが等しく、4マートラであることも<12. 2. 3>で『マンダラ儀軌二十』の偈を引用して示している。

<sup>195</sup> 第一の説の第1、第2タイプのトーラナの場合、高さは12マートラ、幅は18マートラで、「門の3倍」という規定に合致するのは高さのみである。

<sup>196</sup> この偈はすでに<12. 2. 2>に登場している。同一の偈が『四百五十頌』にも含まれている。

<sup>197</sup> チベット訳は「門」(sgo)である。門も門扉も長さは四マートラである。次の注に示したように、著者は意図的に「門扉」という用語を用いていると考えられる。

<sup>198</sup> ここで問題になっているのは「トーラナは門の3倍」とであるという規定に、第3のタイプのトーラナをいかにして合致させるかである。第1と第2のタイプはいずれも12マートラの高さをもち、4マートラの門の3倍になっている。これに対し、第3のタイプは高さは4マートラしかないため、この規定には合致しない。そのため、著者はトーラナの柱の間が水平方向で12マートラであることに着目し、これが「門の3倍」の規定に合致すると解釈する(このことはすでに<12. 3. 4>でも示している)。「ヴェーディーはあまねく門の半分で、カポーラとパクシャも同様に[門の半分]である」という偈を引用するのは、カポーラの長さが「門の半分」という規定が含まれるからである。著者はこの「門」(dvāra)を「門扉」(niryūha)に置き換え、水平に描かれるカポーラの長さが、それと垂直の位置関係にある門扉の半分であると提示し直している。それによって、カポーラと平行となるトーラナの幅に対しても、「門の3倍」という規定が適用しうることを主張するのである。「トーラナは門の3倍」という規定との齟齬を、「水平か垂直か」という問題にすり替えていると見ることができる。

<sup>199</sup> 第二の説の場合、中心のマンダラは一辺32マートラの根本マンダラで、外のマンダラは外周部の内側までの直径64マートラの円である。これに対し、第一の説は根本マンダラにさらに厚さ8マートラの外壁部(これを周囲の部分と呼ぶ)を加えた一辺48マートラの楼閣全体と、外周部も含む直径96マートラのマンダラ全体が1:2になっている。いずれも内のマンダラの2倍が外のマンダラになるという規定に合致するようになっている。

<sup>200</sup> トーラナの柱の上端、すなわちマンダラの外側の線(側面線)から、マンダラの外周の内側の線までは、第1説では16マートラ、第2説では8マートラであるため、14マートラにはならない。14マートラの説が何を典拠としているのかは不明。

<sup>201</sup> チベットに伝わるマンダラの多くには、ヴェーディーの区画の隅のところに、規定どおりの装飾が描かれている。金剛杵は半分であることが多い。この引用の出典は不明。

<sup>202</sup> チベット訳は「月、太陽、宝、金剛杵ふたつ」(zla ba nyi ma rin chen rdo rje dag)。

<sup>203</sup> この引用も出典は不明。

<sup>204</sup> サンスクリット・テキストは「マカラから」(makarāt)。ここはチベット訳にしたがうが、トーラナの左右にあるマカラの間は、12マートラ以上ある。<12. 3. 7>参照。

<sup>205</sup> 出典不明。NRCによればジャヤパドラのマンダラ儀軌からの引用。ただし、該当すると思われる文献には、次のように類似の偈はあるが、まったく同じではない。

Jayabhadra, *Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2192, Vol. 51, 279.3.2. [NRC 117.2]

rta babs (P. bab) sgo yi sum 'gyur te // chu srin gdong byung rta babs dang //

'dod yon bum las byung ba'i // rta babs kyi ni ka ba'o //

トーラナが門の3倍の大きさを持ち、瓶と柱の上にあることはナーガブッディの『マンダラ儀軌二十』にも説かれているが、この文章とは一致しない。<12. 2. 6>および<12. 3. 7>参照。

<sup>206</sup> アーサーラはトーラナの最下段の層の名称である。著者は<12. 2. 5>でこの層を金、あるいはパク

- リーと呼び、その異称としてアーサーラの名前をあげていた。<12. 2. 1>ではアーサーラは門の上部の線の名称としても用いられている。パトラチャター（一部の写本はパトラチャティー）はトーラナの左右に描かれるマカラの口からあふれていると<12. 2. 6>で説明されている。連珠の文様であろう。
- <sup>207</sup> アンチャラは楼閣の外壁とトーラナの柱とのあいだの層（g）を指す名称として、<12. 2. 1>で言及されている。装飾品の名称であろう。
- <sup>208</sup> 出典不明。アンチャラの区画に象と獅子が描かれるマンダラは、たとえば Béguin (1990 : Pl. 34) や Leidy and Thurman (1997 : Pl. 26) などに見られる。
- <sup>209</sup> チベット訳は三角、点、四角、円（zur gsum dang / thig le dang / gru bzhi dang / zlum po rnams）の順である。
- <sup>210</sup> トーラナの柱を指す。
- <sup>211</sup> Skt. ghaṇṭāntarścāmara. Tib. dril bu'i mthar rnga yab. チベット訳は「鈴のはしにある払子」（ghaṇṭāntacāmara?）。
- <sup>212</sup> いずれも出典は不明。
- <sup>213</sup> 鈴の中につり下げられ、振られて周りに当たる部分。
- <sup>214</sup> この部分のサンスクリット ghaṇṭāsulālibaddhāś (あるいは<sup>o</sup> sulālibaddhāś) は意味がよくわからない。
- <sup>215</sup> 直訳すれば「風ではためき、3カ所で折れ曲がり揺れているというあり方で」。
- <sup>216</sup> チベット訳は「小さい鈴が鳴って、シルシルという」（dril chung gi sgra sgrogs pas sil sil zer ba）。
- <sup>217</sup> 払子がどのように付いているのか不明。
- <sup>218</sup> 楼閣の角の4カ所には対角線に添って傘蓋がひとつずつ描かれる。
- <sup>219</sup> トーラナの内部に作った空間に描く。
- <sup>220</sup> dhvjadikam (幢幡など) と読む写本がある。
- <sup>221</sup> 著者は第1のタイプのトーラナで説明する。
- <sup>222</sup> 転輪王の七宝。如意樹に7種の宝が描かれる。如意樹を入れた賢瓶は、トーラナの左右にひとつずつ置かれる。
- <sup>223</sup> チベット訳は「あちらこちらには成就者が、また雲の中から姿を現し、花輪を手にする神のからだを持ったものたちがいる」（bar bar du ni grub pa thob pa rnams dang / me tog gi phreng ba bzung ba sprin gyi sbubs las byung ba'i lha'i lus can rnams so）。
- <sup>224</sup> この後、各マンダラで異なる内陣の墨打ちと、時輪マンダラの墨打ちの説明がある。著者は「すべてのマンダラに共通」と述べるが、時輪マンダラのみは、根本マンダラの外の部分も独自の墨打ちが行われる。<12. 6>参照。

## 略号

|      |   |
|------|---|
| AM   | <i>Āmnāyamañjarī: Śrīsamputatantrarājāṭikā-āmnāyamañjarī</i> by Abhayākaragupta.  |
| BHSD | F. Edgerton, <i>Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary</i> , 2 vols., Delhi, Motilal Banarsidass, 1970 (1953).       |
| GST  | <i>Guhyasamājatantra : Sarvatathāgatakāyavākcittarahasyo guhyasamāja nāma mahākālparāja.</i>                                  |
| HVT  | <i>Hevajratantra : Hevajratantrarāja.</i>   |
| MVAS | <i>Mahāvairocanābhisambodhisūtra : Mahāvairocanābhisambodhivikurvati-adhiṣṭhānavaipulyasūtrendra rāja-nāma-dharmaparyāya.</i> |
| NRC  | <i>sNgags rim chen po</i> by Tsong kha pa Blo bzang grags pa.   |
| Skt. | Sanskrit  |
| SM   | <i>Sādhnamālā.</i>  |
| SPT  | <i>Samputatantra : Samputa nāma mahātantra.</i>   |
| SSGT | <i>Sarvamaṇḍalasāmānyavidhi-guhyatantra.</i>  |

|      |   |
|------|---|
| STTS | <i>Sarvatathāgatattvasaṃgraha nāma mahāyānasūtra.</i>                               |
| SUT  | <i>Samvarodayatantra : Śrīmahāsaṃvarodayatantrarāja.</i>                            |
| SVU  | <i>Sarvavajrodaya : Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-sarvavajrodaya by Ānandagarbha.</i> |
| Tib. | Tibetan   |
| TTP  | Tibetan Tripiṭaka, the Peking edition, Tokyo, Suzuki Foundation.                    |
| VA   | <i>Vajrāvalī nāma maṇḍalopāyikā</i> by Abhayākara Gupta.                            |
| VDT  | <i>Vajradākatantra : Śrīvajradāka nāma mahātantrarāja.</i>                          |
| VPT  | <i>Vajrapañjaratantra : Āryadākinīvajrapañjaramahātantrarājakaḷpa.</i>              |

## 文献

## サンスクリット文献

- Ācāryakriyāsamuccaya*, facsimile edition reproduced by Lokesh Chandra, Śata-piṭaka Series, Vol. 237, New Delhi, International Academy of Indian Culture, 1977.
- Kālacakratantra* (KCT), ed. by S. Rinpoche 1994.
- Kriyāsaṃgraha*, facsimile edition reproduced by Sharada Rani, Śata-piṭaka Series, Vol. 236, New Delhi, International Academy of Indian Culture, 1977.
- Guhyasamājatantra* (GST), ed. and translated by F. Fremantle, PhD dissertation, London University, 1971 ; ed. by Y. Matsunaga, Osaka, Toho Shuppan, 1978.
- Pañcakrama*, ed. by de la V. Poussin, Gand, Universite de Gand, 1896 ; ed. by K. Mimaki and T. Tomabechi with facsimile edition of Sanskrit manuscripts, Tokyo, The Centre for East Asian Cultural Studies, 1994.
- Vimalaprabhā*, ed. by S. Rinpoche, 1994.
- Samvarodayatantra* (SUT), ed. by S. Tsuda, Tokyo, Hokuseido, 1974.
- Sarvatathāgatattvasaṃgraha* (STTS), 堀内 (1974, 1983).
- Sarvavajrodaya* (SVU), 密教聖典研究会 (1986, 1987).
- Hevajatantra* (HVT), ed. by D. Snellgrove, London, Oxford University Press, 1959.

## チベット語文献

## (1) 仏説部 (bKa' 'gyur)

- Āryadākinīvajrapañjaramahātantrarājakaḷpa* (VPT), TTP, No.11, Vol.1, 223.1.6-238.5.4.
- Mahāvairocanaḥisambodhivikurvati-adhiṣṭhānavaipulyasūtrendrarāja nāma dharmaparyāya* (MVAS), TTP, No. 126, Vol. 5, 240.3.2-284.3.8.
- Śrīmahāsaṃvarodayatantrarāja* (SUT), TTP, No. 20, Vol. 2, 202.3.8-221.5.7.
- Śrīvajradāka nāma mahātantrarāja* (VDT), TTP, No. 18, Vol. 2, 93.2.7-144.3.5.
- Sarvamaṇḍalasāmānyavidhi-guhyatantra* (SSGT), TTP, No. 429, 42.5.4-53.1.1.

## (2) 論疏部 (bsTan 'gyur)

- Abhayākara Gupta, *Śrīsaṃpuṭatantrarājaṭīkā-āmnāyamañjarī* (AM), TTP, No. 2328, Vol. 55, 105.1.1-249.1.6.
- Amoghapāda, *Āryamañjuśrīguhyatantrasya maṇḍalavidhi*, TTP, No. 3492, Vol. 78, 15.5.6-18.3.8.
- Amoghapāda, *Maṇḍalavidhi*, TTP, No. 2846, Vol. 67, 119.1.4-121.3.8.
- Ariṣṭidhīmat, *Śrīcakrasaṃvarodaya nāma maṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2249, Vol. 52, 164.3.6-180.4.2.
- Kambala, *Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalopāyikā-ratnapradīpodyota*, TTP, No. 2161, Vol. 51, 189.5.5-201.1.8.
- Kalki Mahāpuṇḍarīka, *Vimalaprabhā nāma mūlatantrānusārīṇīdvādasāsāhasrikā-laghukālacakratantrarāja-ṭīkā*, TTP, No. 2064, Vol. 46, 121.1.1-.
- Kṛṣṇa, *Bhagavacchrīcakrasaṃvaramaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2164, Vol. 51, 210.1.2-217.3.4.
- Jayabhadra, *Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2192, Vol. 51, 274.4.8-288.2.5.

- Jayasena, *Śrīdākārnavatāntrābhīṣekavidhi*, TTP, No. 2235, Vol. 52, 130.1.8-144.1.6.  
 Tathāgatavajra, *Śrīsaṃvaramaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2226, Vol. 52, 74.1.7-85.5.3.  
 Dārikapāda, *Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalavidhi-tattvāvatāra*, TTP, No. 2146, Vol. 51, 164.1.7-171.5.2.  
 Divākaraśāntapāda, *Śrīhrerukabhūta nāma maṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2390, Vol. 56, 222.4.7-246.4.6.  
 Dīpaṅkarabhadra, *Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhi* 『マンドラ儀軌四百五十頌』, TTP, No.2728, Vol. 65, 35.3.6-44.1.2.  
 Durjayacandra, *Supari-graha nāma maṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2369, Vol. 56, 142.2.4-154.1.4.  
 Nāgabodhi (Nāgabuddhi), *Śrīguhyasamājamaṇḍalopāyikā-viṃśatīvidhi* 『マンドラ儀軌二十』, TTP, No. 2675, Vol. 62, 12.1.4-18.3.6.  
 Prajñārakṣita, *Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalavidhi-saṃgraha*, TTP, No. 2186, Vol. 51, 262.4.1-268.1.6.  
 Buddhaguhya, *Vairocanaḥhisambodhitantraṇḍārtha*, TTP, No. 3486, Vol. 77, 79.1.1-1105.8.  
 Bhāvabhadra, *Śrīvajradāka nāma mahātantrarājasya vṛtti*, TTP, No. 2131, Vol.50,1.1.1-97.3.6.  
 Ratnarakṣita, *Śrīsaṃvarodayamahātantrarājasya padminī nāma pañjikā*, TTP, No. 2137, Vol. 51, 71.1.1-119.2.6.  
 Ratnavajra, *Śrīsarvabuddhasamāyogadākinījālasamvaramahātantrarāja nāma maṇḍalopāyikā-sarvasattva sukhodayā nāma*, TTP, No. 2551, Vol. 59, 30.1.8-40.1.1.  
 Ratnākaraśānti, *Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhiṭkā*, TTP, No. 2734, Vol. 65, 141.2.6-178.3.7.  
 Saraha, *Śrībuddhakapāla nāma maṇḍalavidhikrama-pradyotana*, TTP, No.2529, Vol.58, 105.1.4-110.5.6.  
 Saroruhavajra, *Hevajramaṇḍalakarmakramavidhi*, TTP, No. 2419, Vol. 56, 1.1.1-9.1.8.  
 Smṛtijñānakīrti, *Guhyāpannopāyikāsūtravidhi*, TTP, No. 3412, Vol. 75, 189.3.3-4.5.

### (3) 蔵外文献

Tsong kha pa Blo bzang grags pa, *rGyal ba khyab bdag rdo rje 'chang chen po'i lam gyi rim pa*, "gSang ba kun gyi gnad nam par phyee ba" (*sNgags rim chen mo*), TTP, No. 6210, Vol. 161, 53.1.1-226.2.7.

### 二次文献

- 伊藤堯貴 2000 『『蕤晒耶經』蔵・漢訳テキスト研究(3)』『智山学報』49:17-44。  
 北村太道、ツルティム・ケサン 2001 「マンドラの作成についての研究：ツォンカパ著『秘密道次第大論』試訳(6)」『種智院大学密教資料研究所紀要』4:43-68。  
 北村太道、ツルティム・ケサン 2002 「マンドラの作成についての研究：ツォンカパ著『秘密道次第大論』試訳(7)」『種智院大学密教資料研究所紀要』5:33-63。  
 酒井真典 1971 「マンドラの墨打法について」『智山学報』(芙蓉良順博士古稀記念密教文化論集)19:49-71。  
 桜井宗信 1996 『インド密教儀礼研究：後期インド密教の灌頂次第』法蔵館。  
 田中公明 1987 『曼荼羅イコロジー』平河出版社。  
 堀内寛仁 1974 『初会金剛頂經の研究』(下) 高野山大学密教文化研究所。  
 堀内寛仁 1983 『初会金剛頂經の研究』(上) 高野山大学密教文化研究所。  
 密教聖典研究会 1986, 1987 「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā—Sarvavajrodāya—梵文テキストと和訳」『大正大学総合仏教研究所年報』8:24-57; 9:13-85。  
 森 雅秀 1991a 「インド密教儀礼における水」『国立民族学博物館研究紀要』15(4):1013-1047。  
 森 雅秀 1991b 「インド密教における建築儀礼：Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā 和訳(1)」『名古屋大学文学部研究論集』111:53-73。  
 森 雅秀 1992a 「インド密教における結界法：Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā 和訳(2)」『名古屋大学文学部研究論集』114:89-109。  
 森 雅秀 1992b 「観想上のマンドラと儀礼のためのマンドラ」『日本仏教学会年報』57:73-90。  
 森 雅秀 1996 「『完成せるヨーガの環』の成立に関する一考察」『密教図像』15:28-42。

- 森 雅秀 1997 『マンダラの密教儀礼』春秋社。
- 森 雅秀 1998 「ツインマーマン・コレクションの「ヴァジュラーヴァリー四曼荼羅」：チベットにおけるマンダラ伝承の一事例」『美術史』145：34-81。
- 森 雅秀 2000a 「インド密教における成就法と儀礼」『高野山大学論叢』35：23-43。
- 森 雅秀 2000b 「時輪マンダラの墨打ち法」『高木神元博士古稀記念論集 仏教文化の諸相』山喜房仏書林、pp.345-364。
- 森 雅秀 2001 「『ヴァジュラーヴァリー』所説のマンダラ：尊名リストおよび配置図」『高野山大学密教文化研究所紀要』14：1-117。
- 森 雅秀 2003 「ヴァーストゥナーガに関する考察」『東洋文化研究所紀要』142：219-263。
- 矢野道雄・杉田瑞枝 1995 『占術大集成：古代インドの前兆占い 1』平凡社。
- Béguin, G. 1990 *Art ésotérique de l'Himalaya : Catalogue de la donation Lionel Fournier*. Paris : Réunion des Musées Nationaux.
- Bhat, Ramakrishna M. 1981 *Varāhamihira's Br̥hat Samhitā*, 2 vols. Delhi : Motilal Banarsidass.
- Leidy, D. P. & R. A. F. Thurman 1997 *Mandala : The Architecture of Enlightenment*. Boston : Shambhala.
- Lokesh Chandra (reproduced) 1977 *Vajrāvalī : A Sanskrit Manuscript from Nepal Containing the Ritual and Delineation of Maṇḍalas*. Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures Vol. 239. New Delhi : International Academy of Indian Culture.
- Mori, M. 1998 The Synopsisi of the Consecration Ceremony in the *sNgags-rim chen-po* (Chapters V-X) . *Mikkyo Bunka* (密教文化) 199/200 : 1-19
- Poussin, Louis de la Vallée 1896 *Pañcakrama*. Gand : Universite de Gand.
- Rinpoche, Sambhong 1994 *Vimalaprabhāṭikā of Kalki Śrī Puṇḍarīka on Śrī Laghukālacakratantrārāja by Śrī Mañjuśrīyaśa*. Vol. 2. Sarnath : Central Institute of Higher Tibetan Studies.
- Rong tha Blo bzang dam chos rgya mtsho 1973 *The Creation of Mandalas : Tibetan Texts Detailing the Techniques for Laying out and Executing Tantric Buddhist Psychocosmograms*. New Delhi.
- Snellgrove, D. L. 1959 *The Hevajra Tantra : A Critical Study*, 2 parts. London : Oxford University Press.
- Tsuda Shinichi 1974 *The Saṃvarodaya-tantra, Selected Chapters*. Tokyo : The Hokuseido.